

Title	日本現在宋元版解題史部(下)
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1993
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.28 (1993.) ,p.21- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本隆信名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000028-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本現在宋元版解題 史部(下)

尾崎 康

史 鈔 類

東萊先生増入正義音註史記詳節二〇卷 題宋呂祖謙編

〔南宋後期 建〕刊 二〇冊 宮内庁書陵部蔵

丹表紙(一九・七×一二・一センチ)、正崩文の地に唐草文が空押されている。襖装。

元の覆刻本では東萊先生増入正義史記詳節序と題する正義序の首三葉を欠き、第四葉の中途から集解叙、次で古史叙、外記叙、三皇五帝・夏・商・周・秦譜系図、五帝・夏・商・周秦六国都図と続く。東萊先生増入正義音註史記詳節目録。

本文首題は「東萊先生増入正義音註史記詳節卷之一上」(低

六格)集解(四格隔)裴(四格隔)駟(同)正義(同)張(同)守節(同)索隱(同)司馬(三格隔)貞(同)補史(同)司馬(同)貞(同)古史(同)蘇(四格隔)轍(同)外紀(同)劉(同)恕。これは三皇本紀の首で、五帝本紀にも「上」字を除いて同じ首題がある。図書寮宋本書影にこの葉の書影がある。

双辺(一五・四×九・六センチ)、一三行、二四字・注文小字双行。版心 線黒口、双黒魚尾、「史幾」と題する。眉上に小見出し、行二字。耳題があり、小題、巻次、丁付を刻する。

注の「索隱曰」などは墨囲陰刻、「劉氏外紀曰」などの増入音註も墨囲陰刻であるが、改行し、一字低格して始る。

宋諱は匡恒貞微桓慎敦等の字を欠画し、郭字には及

んでいないようである。字様もまずまず良好で、南宋中期の建安刊本かそれを後期に覆刻した本か微妙なところである。

一部に朱句点、朱引、朱傍点が付いた、また墨筆で「正義曰」などの書入があり、附箋にもあり、これらの朱句点、朱引等も室町後期のものであろうか。

尾題「東萊先生増入音註史記詳節卷之二十」。

蔵印は「備後藤／江岡本／蔵書印」、「備前河本／氏蔵書記」、「宮内省／図書印」。

諸儒校正東漢詳節（存卷二四）「南宋後期 建」刊

一冊

東京大学東洋文化研究所蔵

一連の東萊先生の一〇史の詳節本であるが、史記に次でまず宋刊本を取上げ、次に元刊の十史の叢刻本を、そして単独の各史を順に著録することにする。

改裝後補濃紺色絹表紙（二二・一×一四・六_{センチ}）、金鑲玉装

（料紙高さ一九_{センチ}）。

首の副紙は新しいものが三葉あるが、次の比較的古い一葉に「五福／五代／堂宝」「八徵／耄念／之宝」「太上／皇帝／之宝」の玉璽三印がある。

首題「諸儒校正東漢詳節卷之二十四」。左右双辺（一五・六×一〇・五_{センチ}）、一四行、二四字・注文小字双行。版心 線黒口、双黒魚尾、上象鼻に字数、題は「東節二十四」。眉上に標目、各行二・三字、耳題に「酷吏董宣二十四已」のようにある。

欠筆は貞桓敦愍字。

別に「天禄／繼鑑」（陰）「乾隆／御覽／之宝」（陽）、「東方文化／学院東京／研究所／図書之印」。

天禄琳琅書目元版史部に著録の十七史（十史）は、台北の故宫博物院に現蔵で、次掲の書陵部の元劉氏静得堂刊本と同版のようであり、同続目宋版史部の十七史も同本のことらしい。続目（宋版）には他に商漢・晋書・北史詳節を著録するが、はたして宋刊本か疑問であり、いずれも天禄璽印の他に旧蔵者の印章があるから、この僚本ではありえない。

「十史書」（東萊先生十七史詳節）一〇種二七五卷 題宋呂祖

謙編 「元末」劉氏静得堂刊（覆南宋建刊本） 六〇冊

宮内庁書陵部蔵

東萊先生増入正義音註史記詳節二〇卷 四冊

後補艶出暗茶色表紙（二一×一三・八_{センチ}）、題簽が剥がれた

跡の上に外題「史記一之五 史記四冊」と墨書し、その中間に「宝勝院」墨印。第二冊以下はさらに後補の薄赤茶色表紙で、書題簽「史記幾之幾」。第一冊の中央部に大きく貼紙して、十史の各冊数が次のように記される。すなわち「史記四冊 西漢十冊 東漢七冊 三国五冊 晋五冊 南史六冊 北史五冊 隋四冊 唐十二冊 五代二冊 已上六拾冊云々」と墨書し、「宝勝院」(東福寺)印を捺す。

封面は一面いっばいを使って、上方に横に「劉氏靜得堂」、その下に同じく「重刊」、中央に大きく縦に「十史書」、そしてその左右に「今將東萊先生校証善本鼎新／刊乃嘉与四方士友共宝之幸鑒」とある。

三皇五帝・夏・商・周・秦の各譜系図、五帝・夏商・周・秦六国都地理図は宋刊本と全く同じ。東萊先生増入正義史記詳節序、東萊先生増入正義音註史記詳節目録。

「東萊先生増入正義音註史記詳節卷之一上」の次行から六行に亘って、宋刊本と同じく、集解、正義、索隱、補史、古史、外紀の撰者名が掲げられ、司馬貞の貞字はいずれも欠画する。五帝本紀の首題は「東萊先生増入正義音註史記詳節卷之一」。

左右双辺(一六・一×九・八_チセン)、一三行、二四字・注文小

字双行。版心 線黒口、双黒魚尾、題「史幾」。耳題がある。欠画も一部に残るが多くは欠かない。

一部に朱引、朱傍点が見られる。

「宝勝院」(墨)「艮岳院」、「学習／院印」「京都／学校／蔵書／之印」、「御府／図書」「秘閣／図書／之章」の各印。

同じ書陵部蔵の南宋末刊本と較べると、元末ごろのそのかなり忠実な覆刻本であることがわかる。叢刻の書名は一般に東萊先生十七史詳節と称されるが、南北朝七史を除く一〇史であり、この封面に十史書とあるからこれを採用。そして各史ごとに内題をもって著録するが、この首題の標示もそれぞれに異なる。

参附羣書三劉互註西漢詳節三〇卷 一〇冊

同じく後補艶出暗茶色表紙(二一・一×一三・八_チセン)、薄赤茶色紙で裏打補修。本文料紙も裏打。外題または題簽に「西漢書幾之幾」と墨書、右下に史記から通しの冊次(五十四)を書き、中央に「宝勝院」(墨)「艮岳院」印、後者は擦り消されている。

封面は史記と同じ劉氏靜得堂の重刊というものであるが、中

央の書名と左右の文字が次のように異なる。書名は大きく二行に「東萊校証互／註西漢史書」、その左右には「昨刊是書板行已久字画漸漫今新將／先生校証善本鼎新刊行伏幸証鑒」とある。

首に国都地理之図、世系伝授之図各一葉があるが、本来は粘葉装で左右見開きであったのであろう。次で西漢綱領、顔師古註叙例、唐虞叙録、諸家注釈名氏などが数葉に亘る。諸儒校正西漢書節目録。

本文巻首は「参附羣書三劉互註西漢詳節巻之一」と題するが、巻二以降は「諸儒校正西漢詳節巻之幾」、ただし目録と巻九は詳を書につくる。諸儒校正西漢詳節が本来の題名か。

左右双辺（一四・九×一〇^{チセン}）、一四行、二一字・注文小字双行。史記は一三行であったが、西漢書以降はすべて一四行である。このようなことは建刊本、とくにいわゆる麻沙本には珍しいことではない。版心 線黒口、双黒魚尾、題「西幾」、稀に上象鼻に字数。眉上に標注を行三字、左に耳題を刻する。欠画は稀に残っている。

冒頭に朱句点、朱引、墨振仮名。

印章は史記に同じ。

諸儒校正東漢詳節三〇巻 七冊

表紙は西漢詳節と同じく、外題が「東漢書」、史記から通算の冊次は一五〇二一でいずれも墨書。封面も西漢詳節とほとんど異らず、大字のところが「東萊校証互／註□漢史書」と二字めが空格なのは、「西」字を削って入木を忘れたものか。

東漢伝世之図、漢南北軍之図が各一葉、そして諸儒校正東漢詳節目録。本文巻首は「諸儒校正東漢詳節巻之一／（低五格）范曄（以下次行に亘って注）／（同）章懷太子賢（同）」。

双辺（一五・三×一〇・四^{チセン}）、一四行、二四字・注文小字双行。版心 線黒口、双黒魚尾、題「東漢幾」「東幾」等、稀に上象鼻に字数を刻する。耳題「光武巻一」「明帝一已十四」等。宋諱欠筆は桓慎等の字にわずかに残る。

尾題も「諸儒校正東漢詳節巻之三十」。

巻二四には東京大学東洋文化研究所蔵本と同版の南宋刊本が補配されている。左右双辺で、敦愍字を欠く。他の巻はこの覆刻本である。

東萊先生標註三国志詳節二〇巻 五冊

表紙は両漢書と同じ。封面はやや簡略になって、横に「静得

堂書」、縦に大きく二行に「東萊校証／三国志書」とある。

三国疆理之図（一葉）、三国世系之図（半葉）三国紀年之図（同）。上三国志註表。東萊先生標註三国志詳節目録。

本文首題「東萊先生標註三国志詳節目録」。左右双辺（一五・七×一〇・四_チセン）。版心等の形式も前史と変らない。惇字欠画がある。

東萊校正晋書詳節三〇卷 五冊

表紙は同じ。封面は兩漢書と同型で、双行の大字が「東萊先生／校証晋書」とある。ただ小字の左行の「証」を「詳」にくる。

兩晋世系之図、兩晋地理之図（各半葉）、「東萊校正晋書詳節卷之一」。双辺（一五・九×一〇・五_チセン）。

東萊先生校正南史詳節二五卷 六冊

表紙は同じ。封面は三国志と同型で、大字のところを「東萊先生／校証南史」とする。

南北国都地理之図（一葉）、宋・齊・梁・陳世系図（一葉）。東萊先生校正南史詳節目録。「東萊先生校正南史詳節卷之二／

（二_低格）宋本紀（隔六格）唐 李（隔四格）延寿」。左右双辺（一六・一×一〇・五_チセン）。卷二・四首題、五・七首尾題は「東萊先生点校南史詳節」。

卷二五第三・四葉には墨釘の箇所が多く、この前後は字様が劣る。

東萊先生校正北史詳節二八卷 五冊

表紙は同じ。封面は三国志型で、大字のところは「東萊先生／校証北史」。

後魏世系図（半葉）、北齊世系図・後周世系図（半葉上下）。東萊先生校正北史詳節目録。「東萊先生校正北史詳節卷之一」。卷一四首題は「東萊先生点校北史詳節」。左右双辺（一六×一〇・五_チセン）。惇敦敦燉字に欠画があるが、郭は欠いていない。

東萊先生校正隋書詳節二〇卷 四冊

表紙は同じ。封面は兩漢書型で、大字が「東萊先生／校証隋書」。

隋世系之図・隋地理之図（各半葉）。東萊先生校正隋書詳節目録。「東萊先生校正隋書詳節卷之一／（二_低格）帝紀（隔一〇格）唐特

進魏 徵撰」。第二行の撰者名は各巻にないが、伝の首に右と同じく、また志の首(巻二)に「唐趙国公長孫 無忌 撰」とある。

諸儒校正唐書詳節六〇巻 一二冊

表紙は同じ。封面は兩漢書型で、大字は「東萊先生ノ註証唐書」、ただ従前のものは「註」が「校」であった。

嘉祐五年曾公亮の進新唐書表、改頁せず進新唐書積音序が続く。太宗分十道図(一葉)、高祖開基図・太宗混一図(各半葉)、唐世系伝授図(一葉)、唐地理図・唐藩鎮図(各半葉)。諸儒校正唐書詳節目録。

本文巻首は「諸儒校正唐書詳節卷之一」(二格)帝紀(隔七格)歐陽(二格)脩 奉 勅 撰、列伝(巻七以降)の首巻は第二行が「(同)列伝(九格)宋 祁 奉勅撰」となる。左右双辺(一五・九×一〇・四_チセン)。その他の版式は同じ。ただし巻四の尾題は

「諸儒校正増注唐書詳節卷之四」とある。また巻一三第七・八葉のように、耳題がなく、字様も大いに異ったり、巻一二第五・八・一三葉のように粗黒口の葉などがあるが、あるいは明覆刻本の補配があるか。

一部に朱句点、朱引が施される。

東萊校正五代史詳節一〇巻 二冊

表紙は同じ。封面は三国志と同型の簡略なもので、上方に「静得書堂」と横書きし、その下に大字で双行に「東萊校証ノ五代史書」と刻する。

陳師錫の五代史記序。五代分拠地理之図、(五代十国世系図)、(同統表)が計二葉。東萊校正五代史詳節目録。

「東萊校正五代史詳節卷之一」(低二格)歐陽(三格)脩(同)撰(低四格)徐(三)無党(二)註」。

左右双辺(一五・八×一〇・四_チセン)。版心の題が「五代幾」とあるほかは版式は前に同じ。尾題「東萊校正五代史詳節卷之十」。

東萊先生標註三国志詳節二〇巻 「元」刊 二冊

内閣文庫蔵

宮内庁書陵部蔵の劉氏静得堂刊本と同版であろうと思われるから、その三国志の次に「又」と標記して掲げるべきであるが、静得堂本がセットであったからここに別記することになった。ただし、この本にはその封面がなく、印も静得堂で行われたものかはわからない。

後補乳白色表紙(二〇・九×一三^{センチ})。外題は第一冊が「三
国志」と墨書、第二冊が「三国志詳節上」と朱書。

三国世系之図、三国紀年之図、三国疆理之図。上三国志註
表。東萊先生標註三国志詳節目録。本文首題は同じ。

左右双辺(一五・六×一〇・三^{センチ})。

卷七第七葉、一八一五、二〇一七が欠葉。朱句点、朱引を加
える。

桐箱の表に「宋版三国志詳節」と墨書、その蓋裏に貼紙があ
って「箱書付／屋代弘賢先生／真蹟也」と。「□空／之印」
「長宜／子孫」(陰)「沾潮／之印」(陰)、「天下／無双」「読杜
／草堂」、「大日本／帝国／図書印」「太政官／文庫」「内閣／
文庫」の諸印。

東萊校正五代史詳節二〇卷 [元] 刊 一冊

内閣文庫蔵

右に同じ。

後補薄茶色表紙(二〇・六×一三・一^{センチ})。外題「五代史詳
節一之十完」右下に「十七史詳節」と墨書、「昌平坂／学問所」
墨印。

五代史記序、五代分拠地理之図、東萊校正五代史詳節目録、
そして本文。

左右双辺(一五・七×一〇・四^{センチ})。

「江雲渭樹」「林氏／蔵書」、「昌平坂／学問所」(墨)「浅草文
庫」、「日本／政府／図書」印。

又 三冊

宮内庁書陵部蔵

右に同じであるが、同書のためこの標記となる。

後補暗黄土色表紙(一九・七×一二・六^{センチ})。題簽「十七史
残本(共三)一」。

五代分拠之図、五代史記序、東萊校正五代史詳節目録、本
文。

一部に朱句点、朱引を加える。

「秘閣／図書／之章」「帝室／図書／之章」印。

先に触れたように、中国訪書志によれば、台北所在の十七史
(十史) 詳節の揃いや断片は、すべて書陵部の元劉氏静得堂刊
本と同版であるが、そのどれにもこの書肆の名はみえない。中
国古籍善本書目、それと重複するが北京図書館古籍善本書目に

もほとんど元刻本と著録され、同版であるかどうかは未明であるが、少くとも静得堂とはない。

一方、宋版の存在であるが、唯一、北京図書館蔵の東萊先生増入正義音注史記詳節存卷一・二の一冊が宋刻本とされ、左右双辺と記されている。冒頭の書陵部蔵の四周双辺の史記とは別版で、もう一版があるようである。

この類の本は科挙受験用にかなり出版されたであろうが、以上の書名のものは、このように宋刊本と元の覆刻本であり、刊刻の時期はともに宋末と元末に降ると思われる。中国古籍善本書目によると、他にこれに類する宋元刊本が、呂祖謙撰と題して次のようにある。

名公増修晋書詳節三〇卷 宋刊

名公増修南史標註二五卷（存六卷） 宋刊

名公増修標註隋書詳節二〇卷 宋刊

石壁精舍音註唐書詳節（存一一卷） 宋刊

京本増修五代史詳節一〇卷 宋刊

諸儒先生標註三国志詳節二〇卷 元刊

上海図書館の石壁精舍音註唐書詳節は存七卷であったが巾箱本であり、南京大学図書館の名公増修南史標註はさらに小さ

く、豆本というべきものであった。

歷代故事一二卷 宋楊次山編 宋嘉定五年（一二二二）

序刊 一二冊 静嘉堂文庫蔵

後補花鳥模様黄色表紙（三二・七×二三・二センチ）、襖装。

首の西漢目錄の次に「壬申歲仲春望日坤寧殿題」一一行（無界）がある。壬申は嘉定五年であろう。第八行が破損。

本文は「西漢／（四格）高祖約法三章通鑑九」のように標題に典故を注記して始る。左右双辺（二〇・七×一五・七センチ）、八行、一六字・注文小字双行三五字内外（不定）。版心 白口、單黒魚尾、「西漢（丁付）（刻工名）」のように題する。眉上に標注、行四字。注記は稀に左右や行間にもある。

本文は一項につき四〜一〇行、四、五行の場合が多い。第四冊に東晋目錄（補写）、南史・北史（目錄・補写）、第七冊に唐書目錄、第一〇冊に五代史記（目錄）、そのあとに左伝史記、家語、説苑、新序、戦国策とあって、三国魏志・呉志・蜀志（目錄）があり、第一二冊までこの順に本文がある。これら各史から故事を抜萃した書である。

宋諱欠筆は玄裔驚弘殷匡恒禎貞桓完慎敦等の字に

行われている。版心の部分の破損が多く、刻工名はあまり採録できない。4方至 王玩 6朱玩 7吳志 吳椿 宋琚 李倚 10高異 11陸選 14趙中 15劉昭。しかしこの一人の名は南宋中期の多くの刊本の中に見出される。越刊八行本注疏では、尚書正義に方至ら四名、周礼疏に同じく六名、礼記正義に吳志ら五名、前掲の古史に六名、金沢文庫・真福寺・書陵部蔵の一〇行本の玉篇に八名、静嘉堂・国会・龍谷大学の一〇行本の広韻に六名、晦庵先生文集に五名、嘉泰四年跋刊の東萊呂太史文集に四名、それに三名の共通する書が八という具合である。とりわけ南宋前期刊の兩淮江東輿運司の漢書と南北朝七史との南宋中期修葉には、劉昭が七史、方至と高異が六、吳志と吳椿が五、朱玩と宋琚が四、王玩が三史の補刻を担当している。嘉定五年序の際の刊と見てよからう。

蔵印「文淵／閣印」、「怡府／世宝」、「明善堂／藏書／画印記」、「季振宜／字詒兮／号滄葦」、「季印／振宜」、「滄葦」、「季印／応召」、「支印／允堅」、「支印／允堅」(陰)「梅谿／精舍」、「玉蘭／堂」、「卒夷／館印」、「杲／坡父」、「冉／弼」、「臣陸／樹声」(陰)「帰安陸／樹声桐／父之印」(陰)。

重要文化財。四庫未収。中国古籍善本書目など、他にまった

く著録をみない。

通鑑総類 零本(存卷五) 宋沈樞撰 元至正二三年平江

路儒学刊 一冊 小汀文庫旧蔵

新補濃紺色表紙(二九・三×一六・五センチ)。

首題は「通鑑総類卷第五」、次行低一格で「繼嗣門」。

左右双辺(二四・三×一五・五センチ)、一一行、二三字。版心線黒口、単黒魚尾、題は「通鑑総類卷五 繼嗣門 一」ときに上象鼻に字数、下に刻工名。刻工名は、未、元、景仁、可。欠画が、恒 恒 匡字に残っている。

第三七葉まで存し、末葉が欠か。

卷末に「小汀文庫」印。同文庫を出たときに調査の機を得たが、現所在を知らない。

通鑑総類は資治通鑑の文を冊府元龜の例に仿って二七一門に分け、毎門各々内容に随って標題を設け、間に司馬光の議論を取ってこれに附したものであるが、門目に重複するようなものがあるなどして繁雑であると、四庫提要はいう。

台北の中央図書館と故宮沈氏研易楼に完本があり、後者の解題が詳しい。大陸では、北京、上海、南開大、遼寧省、吉林

省、広東省、高州県の各図書館に完本があり、残本も清華大と故宮図書館にあるという。この中国古籍善本書目に著録されていないが、北京大学図書館に卷一七第三一―三九葉の零巻があり、わずかに存九葉ながら、粘葉装の早印本であった。

歴代諸史君臣事実箋解二四巻 撰者不詳 〔元〕刊

一二冊 尊経閣文庫蔵

後補香色表紙（一九・四×一二・六_{センチ}）、裏打補修。

歴代諸史君臣事実箋解目錄卷上（下）。上は卷七までで、三皇から五代までの史実を、通鑑紀事本末のように標題を付けて目とする。下は同時期の歴代君臣を採りあげて、同様に扱う。ただし本文は、一標目について二―一〇行に簡略に説明される。

本文首題「歴代諸氏君臣事実箋解卷之一（四格）前集（墨題）」。次に王朝名を二行に跨って花魚尾の下に大書し、帝名は一行。左右双边（一六・六×九・八_{センチ}）、一〇行二一字・注小字双行。版心小黒口または線黒口、双黒魚尾の間に「故事（事実・事）幾」の題に丁付、字数や刻工名はない。字様はやや建刊の風を帯びながら一貫していて、建刊本とも見えない。卷二〇―六裏一行と卷二四―一表四行に墨釘の箇所があり、ごく稀に貞字に欠

画がある。なお、本文末には必ず圈内（陰ときに陽）に出として出典を記す。朱句点と朱引。尾題は「歴代諸史君臣事実箋解卷之二十四」。「尊経／閣章」のほか一字の古印があるが、判読不明。

序も撰者名もなく、四庫提要や諸叢書にも入っておらず、撰者が不明である。他にこの版本の存在を聞かない。

漢雋一〇巻 宋林鉞撰 〔元〕刊 五冊 内閣文庫蔵

後補淡茶色表紙（二四・六×一七・八_{センチ}）、外題「漢雋 一二」のように墨書、「昌平坂学問所」朱印。虫損が甚しく、裏打補修されている。

元延祐七年袁桶の漢雋後序は首葉を欠いて題名がない。次に宋淳熙一〇年王休の漢雋序。漢雋目錄。本文首題「漢雋卷第一」。左右双边（二〇・三×一五・七_{センチ}）。九行、漢書中の古雅の字を断片的に取るために本文が行を満たす場合がないが行一五字程度、注文は小字双行三〇字。版心 白口、双黒魚尾、題がなくて「卷幾」とだけ刻し、丁付は全冊通しで一三八まで。刻工名があるが虫損のためほとんど見えない。それでも亘文仲文茂之 仲華 仁甫 益章などが読みとれる。

卷四第四葉と卷末の八葉（二〇一—一五〇二二）が補写。

市橋長昭の寄蔵の跋がある。同文、同筆。

「仁正侯長昭／黄雪書屋鑒／蔵圖書之印」、「浅草文庫」

平坂／学問所」「日本／政府／図書」印。

漢籍には宋版が淳熙五年滁陽郡齋刊本（上海図書館）、淳熙一

〇年象山県学刊本（北京図書館）、嘉定四年滁陽郡齋刊本（北京）とあり、元版も北京大学図書館の二部と上海図書館本は版心が粗黒口でこの本と異なる。したがって少くとも宋元版で五種が存在するが、いずれも行格が同じく、匡郭の寸法も近く、宋版三種も白口であり、丁付も全巻を通してあって、覆刻かそれに近い関係にあると思われる。ただし、巻七首の目次のところは淳熙五年刊本とこの元版が一致するが、粗黒口の元版は一部を省略して「宋括山林鉞甫纂輯／三山後学鄭珞校刊」の文字に変えている。

地理類

太平寰宇記二〇〇巻目錄二巻 残本（存七〇巻） 宋楽

史撰 「南宋中期」刊 二五冊 宮内庁書陵部蔵

存巻次は後に別記する。

後補薄黄茶色表紙（三三・九×二四・九_{チセ}）、題簽「太平寰

宇記 一（二五）」、第一冊にだけ中間に「大欠巻」と記されている。粘葉装。

首に「太平寰宇記序／（三_低格）朝奉郎太常博士直史館賜緋魚袋臣楽史」一葉。続いて太平寰宇記目錄上下二巻。

本文首は「太平寰宇記巻第一／（二_低格）河南道一（隔五格）東京上／（三_低格）開封府」に始る。

左右双辺（二二・五×一八・三_{チセ}）、一行、二〇字・注文小字双行。版心は白口でやや巾広、魚尾はなく、上方に大小字数と刻工名、横線の下に「寰宇（記）巻幾（丁付）」の題、稀に刻工名が下方にある。刻工名は 午又 友又 王良 眉陽王朝田友 田圭 田祖 徳兪、单字が 才午友王元方先召定良祖袁福朝龜。宋朝に渉る語の前は空格または改行され、欠画が玄滋弦朗 弘泓殷潑 匡篋胤恒 禎貞徴樹 頊桓完 構邁購 慎敦等の諸字に行われている。「敦」はほとんど例外なく欠くのにたいして、「郭」は頻出するがまったく欠筆しない。

本文の冒頭の府・県名は陰刻、県内の記事は一字を低げる。各巻末に「校勘」と題する一、二葉を附刻することが多い。

本書残存の巻数・紙数については、図書寮典籍解題漢籍篇に

表示されているが、改めて整理すると次のようになる。一卷の首尾を具備するのは目録のほか卷一・二・七・九・九一・九九・一〇一・一〇四・一〇七・一〇九・一一二・一一三・一一五・一一八・一二五・一三三・一三七・一四一・一九五・一九九の三一巻（うち一八巻に校勘がない）である。欠葉のある巻は、末二葉だけを欠くもの、わずかに存一葉の巻と多彩であるが、卷三・五・六・一〇・一二・一六・三七・四四・四七・四八・五〇・七二・七七・七八・八八・八九・九〇・九六・一〇二・一〇三・一〇五・一〇六・一一〇・一一一・一一四・一二四・一三八・一四二・一四三・一四七・一四八・一四九・一五五・一六一・一八七・一八八・一八九・一九四・二〇〇の計三九巻。結局、一三〇巻が欠巻である。

「金沢文庫」印が各巻首尾の一六箇所に捺され、関靖氏の金沢文庫の研究には第四号印に分類されているが、一方に疑印説もある（宋本書影解説等）。他に「秘閣／図書／之章」「帝室／図書／之章」。

編者樂史は太平興国四年（九七九）に宋が全国統一を果したあと、この書の編纂を命じられた。四庫全書総目提要等によれば、唐の賈耽の十道志や李吉甫の元和郡県志等の形式を改め

て、宋の一三道と四夷について、その管下の道州県の地理上の各分野について広く記述し、以後の地誌の体例の骨格を作り出したといわれる。ただ当時のこととて燕雲一六州の記事は少い。

完本は伝存せず、四庫採進本（浙江汪啓淑家蔵本）は卷一一三・一一九の七巻を欠くが、本版の六巻弱によってほぼ補完しうる。そのために古逸叢書はこの六巻を影刻した。本版は南宋中期刊ながら初印に近い美本であり、他の現存本がすべて清代の刊写本であるだけに、全巻の三分の一ほどの残本ではあるが、存在の意味は大きい。経籍訪古志卷三著録。

新編四六必用方輿勝覽四三巻・後集七巻・続集二〇巻

（有欠）・拾遺附録 宋祝穆撰 宋嘉熙三年（一二三

九）序刊 四三冊 宮内庁書陵部蔵

後補薄茶色表紙（二三・四×一四・三_{センチ}）。外題「方輿勝覽

（巻次）」と墨書し、「昌平坂／学問所」墨印を押す。裏打補

修。

首に次のような両浙転運使の録白を掲げる。

両浙転運使 録白

拋祝太傳宅幹人吳吉狀本宅見雕諸群

志名曰方輿勝覽并四六宝苑兩書並係

本宅進士私自編輯數載辛勤今來雕板

所費浩瀚竊恐書市嗜利之徒輒將上件

書版翻開或改換名目或以節略輿地紀

勝等書為名翻開攙奪致本宅徒勞心力

枉費錢本委實切害照得雕書合經

使台申明乞行約束庶絕翻版之患乞給

榜下衢婺州雕書籍外張掛曉示如有此

色容本宅陳告乞追人毀版斷治施行奉

台判備榜須至指揮

右今出榜衢婺州雕書籍去外張掛曉示各

令知悉如有似此之人仰經所屬陳告追求

毀版施行故勝

嘉熙二年十二月 日勝

衢婺州雕書籍去外張掛

轉運副使曾

台押

福建路轉運司狀乞給勝約束所屬不得翻

開上件書版並同前式更不再錄曰

次に嘉熙三年の呂午の序、そして新編四六必用方輿勝覽總目が正集卷四三までを収め、やはり嘉熙三年の祝穆の自序（草書に近い行書）が続く。以上首目第一冊。

「新編四六必用方輿勝覽卷之一

建安祝穆和父編」

の首題。左右双辺（一七・四×一一・六センチ）。標出の地名や字句等は大字で双行に跨り、注は小字で有界一四行、行二四字、稀にさらに小字双行の注もある。版心は線黒口、覽幾・覽後幾・覽統幾・拾遺のように題し、丁付を刻する。

南宋も後期の編纂で、宋諱に当る字はなるべく避けたいが、それでも欠画は謹嚴ではなく、「玄弦朗匡貞偵漬樹桓惇敦墩筠」等の字に稀に見られる程度である。ただし卷二〇の瑞州の条で、筠州の名を「宝慶初（一二二五）州名犯御諱改瑞州」とその沿革に述べ、この理宗の嫌名の字をたびたび欠筆していることは、それより一四年後の嘉熙三年の刊序に見合うと思われる。また、語の宋朝に涉るときはその上を空一格とする。字様も南宋後期の建安のものである。なお毎葉、耳題を刻する。卷首の兩浙轉運司錄白に兩序を併せ、字様や筠字の欠画を考慮し、また北京、上海兩圖書館に新編方輿勝覽七〇卷の咸淳三

年（一二六七）吳堅・劉震孫刊本が蔵されるということからも、この「四六必用」と冠して三集に分たれた本は、少くとも正集が嘉熙三年かその直後に刊刻されたものとみてよからう。次に述べる後集と続集は、引続いて直ちに出版されたのか、やや間を置いたのかわからないが、字様に変化は見られず、まして印面に変化はなくて、この本は同時に印行されたものと思われる。

卷三八は第一二葉まで存するが、文が題詠の途中で終わって四六もなく、欠一葉らしい。

正集の尾題は上半が欠けて「卷之四十三」の五字だけが残るが、この前に「淮蜀見作／後集刊行」の二行があつて、未載の淮蜀について後集を刊行することを予告している。その後集は淮だけの七巻で、さらに続集二〇巻が蜀の四路を扱う。これらの巻頭は正集と変わらず、ただ首題の下方に「後集」「続集」と墨田陰刻する。後集の目録はなく、続集のはその首の第二三冊にある。次に第二八冊になるが、初行に「今具引用文集于后」として、数千篇と称する引用の詩文や史伝等の篇名、書名を分類して一覽の用に供する。第二行以下に木記のように四周を双辺で囲んで、「是編蒐獵名賢記序詩文及史伝稗官雜説／殆数千

篇若非表而出之亦幾明珠之暗投／今取全篇分類以便檢閱其一聯片語不成／章者更不贅錄蓋演而伸之則為一部郡志／總而會之則為一部文集庶幾旁通曲暢云」の五行があつて、ここに説明する通りの内容がある。この次、「引用文目終」の尾題の前に「淮蜀詩文／□□後集」とあるのは、本来これは後集より前にあるべきをいうのか。そしてさらに「新編四六必用方輿勝覽拾遺附錄／建安祝穆和父編」と題して、臨安府以下、四三の府州軍について拾遺を附するのであるが、題の次行から同様に次のようにいう。「是篇亦既鋟梓流布矣重惟天下奇聞壯觀／見於文人才士之所紀述者浩不可窮耳目／所及幸而得之則亦泰山一毫芒耳因閱群／書復抄小集附刊于後名以拾遺每州各空／其紙以俟 博雅君子統自筆入或因囑書／者錄以見寄使足成此一奇書蓋所深望云」。後の新編方輿勝覽七〇巻では、これら拾遺所収の文は各巻の本文の中に挿入されている。拾遺は一巻、いま二冊に装訂されているが、丁付は通してある。

後集と続集に収める地域についてはわずかに触れたが、正集は浙西路の臨安府に始つて、浙東路、福建路、江東路等の各路の府、州、軍に及んで行く。府州軍ごとにまず建置沿革を述べたあと、目録首に「今將每郡事要標出卷首余並倣此覽者切幸詳

「鹽」と称して、挙げられた郡名、風俗、形勝、土産、山川、学館、堂院、亭台、接閣、軒榭、館駅、橋梁、寺觀、祠台、古跡、名宦、人物、名賢、題詠、四六の二〇の事を跨行大字にして掲げ、その中の一つ一つについて続集にある引用文目に挙げられた詩賦序記などの関連記事をもって、それらを説明するものである。しかし道里、田賦、戸口、関塞等のように他の地誌に詳記されるものを省略して、地理志というより名勝志であって、掌故の面では益するところが少いが、詩文にたずさわる人々の間に珍重され、佚文も多く含まれているともいわれている（大谷大学善本聚英）
（新編方輿勝覽解説）

最終冊末の副紙に市河三亥書の市橋長昭の寄蔵の一文がある。

寄蔵

文廟宋元刻書跋

長昭 夙從事斯文經十余年図籍漸多意方今／蔵書家不乏於世而其所儲大低属輓近刻書／至宋元槧蓋或罕有焉長昭独積年募求乃今／至累數十種此非独在我之為艱而即在西土／亦或不易則長昭之苦心可知矣然而物聚必散是理數也其能保無散委於百年之後乎孰／若舉而獻之於 廟学獲籍

聖德以永其伝則長昭之素願也虔以宋元槧／三十種為獻是其一也

文化五年二月

下総守市橋長昭謹誌

河三亥書

この寄蔵の跋文を、前輯所載の本稿（上）の五朝名臣言行録と国朝名臣事略、さらには本稿の漢雋の項では略したが、更めてここに全文を掲げた。

朱筆で句点、朱引、圈点、傍点、傍線を施し、墨筆で眉上に名称・事項を見出しのように記入する。

蔵印は「竜眠」、「仁正侯長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」、「昌平坂／学問所」（表紙冊尾）「浅草文庫」、「御府／図書」、「内務省／文庫印」。

次掲の新編方輿勝覽はかなり存するが、本版は他にまったく現存しない。

新編方輿勝覽七〇卷 宋祝穆編 「元」覆宋「咸淳」刊本
二三冊
宮内庁書陵部蔵
後補淡褐色表紙（二〇・五×一三・六センチ）。題簽に「方輿勝

覧「」のように墨書。裏打。補写の扉があつて、上方に「日新書堂」と右横書し、中央に「刊新方輿勝覽」と大書、その左右に二行ずつ、次のように記す。「古者疆理有図郡邑有志今無堅章步極／詎能歴覽而週知焉是編所集州県沿革／山川名勝風物産辞章吟詠靡不備載／方輿万里開卷瞭然誠為士夫之勝覽云」。この扉書は二八部を数える他の本にはまったくないらしく、中国古籍善本書目にも日新書堂の名はみえない。これがなにに拠つて補写されたはわからないが、巻中の一〇数葉の補写葉と同筆のようである。

首に嘉熙己亥（三年）呂午の方輿勝覽序があるのは四六必用本と同じで、続く新編方輿勝覽目錄はその正後続集を合して七〇巻となる。祝穆の自序（跋）は巻末にある。

本文巻首は「新編方輿勝覽卷之一／（低二〇格）建安祝穆和父編」。左右双辺（一七・三_チセン×一一・四_チセン）。標出の地名や事要は大字で兩行に跨り、行一四字。本文は有界一四行、

行二三字。建置沿革、郡名、風俗、形勝、土産等の標出事要は墨圈陰刻で跨行。版心は線黒口で双黒魚尾、題は「方・覽・勝覽」等、丁付は陰刻と陽刻とある。府州郡名などを耳題に刻する葉が多い。刻工名はない。宋諱の匡貞漬桓完慎惇筠等の欠筆

が残るが、宋咸淳刊本よりはるかに減っている。

一部に朱句点、朱引が入られているが、これは補写葉にもある。補写は卷三第一五・一六葉、四一七、九、五一五・六、四〇一八、四二一七・八・一三、四八一七・八、四九一三、五〇一五等。丁付では卷二第二三葉がなく、中央図書館本等も同じであるが、文意は続く。

尾題「新編方輿勝覽卷之七十」。その後に嘉熙己亥の祝穆の自序（版心題は跋）がある。

蔵印は「佐伯侯毛利／高標字培松／蔵書画之印」、「秘閣／圖書／之章」、「帝室／圖書／之章」。

本版に先行する南宋後期の刊本が、北京・上海両図書館に蔵され、一九八六年に上海古籍出版社から影印本が出ているが（附人名引書地名索引の縮印本が一九九一年に刊行された）、これはその覆刻本である。影印本は上海図書館本を底本とし、巻末の咸淳丁卯（三年・一二六七）の祝洙（祝穆の子）の跋と兩浙轉運司の録白との計五葉を北京図書館本で補ったとされるが、譚其驤氏の前言（「論方輿勝覽の流传与評價問題」）によれば、兩本は必ずしも同版でなく、ごく一部に北京本の繁体

字が上海本で簡体になっている場合があるという。北京図書館善本書目には、咸淳三年吳堅・劉震孫刻本（二〇冊）とあるから、その刊記があるはずである。影印本にはこれがないが、上海本はその宋末の覆刻本であろうか。この元の覆刻本よりは確かに古い本で、宋咸淳中の刊とみられる。

ともかくこの影印本を前掲の新編四六必用方輿勝覧（以下、四六本と称する）と較べると、次のように改訂増補されたことがわかる。

まず、四六本の前集四三卷、後集七卷、続集二〇卷の卷次がそのまま通されて、全七〇卷となる。

そして呂午の序に次ぐ新編方輿勝覧書目に、首に「今将每郡事要標出卷首」とだけ記して、四六本の続く一〇字を省き、その標出する事要がやや整理されて、一部の名称が変わって二〇から一八となり、とくに末の四六の二字がなくなっている。

目録が七〇卷となったことは前述の通りであるが、四六本以後の名称や行政区画の変更に伴う改訂が、ほぼ次のようにある。巻五の四六本の嚴州が建德府に、巻九の温州が瑞安府に、後集巻一一の忠州が巻六一で咸淳府にそれぞれ変わったのは、本文の建置沿革によれば、咸淳元年八月に州から府に昇格したも

のである。他に巻四一の宜州が慶遠府となり、巻三七の連州が巻三六の潮州管下の循州を含めて循州を称し、また巻二九の岳州管内の州郡の順序が入れ代っている。

目録の次に「今具引用文集于后」があり、書名の下に「新增」と陰刻するものが一七四もあって、本文のその箇所をみると、確かに四六本にない引用がある。ただし四六本の引用が刪略されることもあって、全体としては分量に大きな差はなからう。

これらの増改は祝洙らによって行われたと思われ、それが咸淳三年に新編方輿勝覧となり、宋末に覆刻され（上海本）、さらに元代に覆刻されたものが日本と中国に計三〇部ほども現存するわけである。

本版は右のかなり忠実な覆刻本であるが、管見の限りでは影印本よりさらに略字が増大し、また引用文集の目録や祝洙の跋を具える本もまったくない。しかし、それらを除くと上海本の覆刻であるから、四六必要本との相違を説明するために、上海本の影印本を詳しく取上げたのである。この覆刻は北京・上海本の経緯をみても、字様からも元代のものであるが、従来、宋刊本と誤られてきたのは、咸淳刊本の存在が知られず、その欠

画が受け継がれたためであろう。

又 卷三一・三三補配新編四六必用方輿勝覽（宋本）

二六冊

宮内庁書陵部蔵

後補香色表紙（二七×一七・二_チセ_ン）、外題「方輿勝覽 幾之幾」
「昌平坂／学問所」墨印を右肩に。匡郭の外縁で切断してやや大型の台紙に貼るが、耳題のところは存。台紙はかなり新しいが、「林氏蔵書」「大学蔵書」「浅草文庫」印が捺されている。

呂午序、祝穆自序、目録があつて本文。

朱筆で句点、朱引、連合符、傍線点、返点、漫漶や墨釘のところに補字がほぼ全巻にわたって詳密に書入れられ、墨筆の返点、送仮名や一本との校語が、四六本には句点がある。少くとも朱筆は室町後期のものと思わ、蔵印の法苑寺の時代のものか。

補写葉は卷三第一五・一六葉、四一七・八、五一五・六、四〇一八等、前掲本と同じところが多い。

蔵印は「法苑寺」、「林氏／蔵書」「大学／蔵書」「弘文学士院」（陰）「浅草文庫」「昌平坂／学問所」「御府／図書」。

又 二〇冊

宮内庁書陵部蔵

後補簿茶色表紙（二〇・二×一九・七_チセ_ン）、外題「方輿勝覽 幾」裏打。

呂午と祝穆の序、目録で本文。

補写葉は卷一八第五〇八葉、一九一四〇七・二三、二〇一六・七各表、四八一七・八、七〇一六と、卷四八のものを除いて前二本と異なる。

版木に傷みがあり、後印本。

蔵印は「妙覚寺_{住常}日典」、「徳藩／蔵書」「明治二十九年／徳山／氏利家蔵書／第 番共 冊」、「図書／寮印」。

又（卷三五〇三八補写）

二〇冊

陽明文庫蔵

後補濃藍色表紙（二〇・七×一三・六_チセ_ン）、題簽「方輿勝覽 幾之幾」裏打。

呂午と祝穆の序。目録。そして本文。

補写の四卷二冊は、次掲本からここに移したもので、藍色の表紙も他巻と異なる。また卷四三〇四五・四九・五〇の二冊もこれと同じ新しい表紙で、本文料紙もやや茶色がかかり、朱点が次掲本と同じであるし、次に述べる雲沢庵云々の墨書や近衛蔵印

— 39 —

葉等であるが、一部は前掲の諸本と同じ葉である。

「尊経／閣章」印。

又 (卷二〇補写)

一五冊

大谷大学図書館蔵

後補香色表紙(二五・四×一五・六_チセ_ン)、裏打。

呂午と祝穆の序。目録。本文。

朱句点と朱引を施す。

補写葉が卷一五第一五葉、一九一三、一八、三一―三三、

四〇―一八、四五―一二、四六―一〇、一二、四八―七・八・五

〇、五二・五九、六六等。一部は前掲各本と共通する。

各冊首に「冷泉府書」印。「大谷／文庫」「大谷大学図書館」

印。大谷大学善本聚英所載。

又 (存卷五一、五八)

三冊

お茶の水図書館(成實堂文庫)蔵

後補香色表紙(二二・六×一九・七_チセ_ン)、襖装。

第一冊は表紙を欠く。第三冊表紙右肩に「七行／大字十四／

小字廿三」と行格を墨書。

蔵印は「常伯」、「画舫／収貯」(陰)、「蘇峰／学人」(陰)。

又 「元」修 一五冊

名古屋蓬左文庫蔵

後補香色表紙(二三・四×一四・二_チセ_ン)、外題「方輿勝覽

二(十五)」と墨書。裏打補修。

呂午と祝穆の序。目録。本文。

一部に朱句点、朱引、朱傍点。

かなり後印で、卷三七、四〇、四二、四四などに漫漶のはげしい葉がある。さらに、原刻の右上りの特徴が失せ、字様の固

い「元」修葉があり、あるいは修は明初に近い。卷二九第八・

九葉、三九―一・二、四〇―三、五・七、四一―一・二、

四二―一・二・五・六・一・一・二、四三―一三、一六、四八

―七・八、五三―一三・一四、七〇―三・四葉などがそうで、

卷三三第四葉の首五行に墨釘が甚しいのは前掲の各本にみられ

なかったし、右の修葉はそれらの本に欠または補写葉であった

ところである。卷首の祝穆の「穆」以下が墨釘の葉さえある。

明らかに元以後の修である。

「御／本」印。

歴代地理指掌図

撰者不詳

〔南宋前期〕成都市西倉

家刊 一冊

東洋文庫蔵

新補黒色絹表紙(三一・五×二〇・八_チセ_ン)、金鑲玉装(料紙高さ二七・四_チセ_ン)。

歴代地理指掌図序、その第二葉裏第三行から歴代地理指掌図目録、第三葉の古今華夷区域総要図から第四八葉の聖朝升改廢置州郡図まで、二葉を除いて各図、そして総論二葉という構成である。全五〇葉。

序をはじめ約半分が左右双辺(二一・九×一六_チセ_ン)、他は四周双辺。序・目録、第四・一二葉、総目の計六葉の版心は白口、上象鼻に字数、題を「指掌(丁付)」と刻するが、下方は損傷して定かではない。他の四四葉は中央の過半が地図で、左右に界線があつて、数行ずつ地理、地名の説明をする。序目と総論が二葉、他はすべて地図も含めて各一葉に改めようとして、行格はすべて異り、文字の大きさも小さきまでである。因みに序目は一八行二八字、第四葉は一五行二二字、第一二葉は一九行三〇余字、総論は一七行三〇字で、地図の葉には行二二字、また行四〇字で注が小字双行の葉もある。そのため、各葉とも余白がまったくない。地図が中央にあるためにその葉には版心がないが、いずれも図の左肩に横書で図名を記し、右下方に「五号」以下、丁付を陰刻し(序から通しての数字)、その

上方に大小字数のある場合がある。

第二〇・二二葉に墨釘の箇所が各一ある。

末葉の末行下半に、「西川成都府市西俞家印」とある。ただし、字様は柔く、南宋前期も終りのころの江浙の風をしていて、いわゆる蜀眉山の爪のように鋭いものとは異なる。

欠画は玄弦敬匡桓慎等の字にみられるが、あまり嚴格ではない。

朱筆の句点、朱引、傍点、圈点が施され、墨筆で眉上、右欄外に考証、校字が各二あり、朱筆で見出しを書入れた例もある。室町後期のものと思われる。

蔵印は「清見寺常住」、「福堂」、「雲岫文庫」。

本版は、中国にはわずかに明刊本があるのみということで、一九八九年に上海古籍出版社から影印出版されたが、その序言で譚其驤氏はこの撰者を一一世紀末の程安札と推定されている。氏の序言と曹婉如氏の前言には、行政上の変改と所掲の地名とを歴史的に考証し、編纂の時期に言及してまことに有意義であるが、本版の刊行を南宋初年とするのには同意しかねる。曹氏が指摘するように、第一幅図に「肅慎」の慎字を欠かないのは確かであるが、第五幅図(七号)では図と本文、その注と

に欠画がある。字様もわずかに南宋中期の要素を帯びてきており、この欠筆に見合う南宋前期の後半、淳熙年間（一一七五～八九）ごろの刊であろう。

咸淳臨安志一〇〇卷（欠卷六四・九〇・九八・一〇〇）

宋潜説友撰 「宋咸淳 臨安府」刊（卷一・六五・六

六・八一～八九補写） 四八冊 静嘉堂文庫蔵

後補金砂子散濃紫色表紙（三三・二×二二・四_{センチ}）、金鑲玉装（料紙高さ三〇・七_{センチ}）。

首に潜説友の咸淳臨安志序、そして咸淳臨安志目録。

卷一は補写で首題がないが（尾題は存）、行格は一〇行二〇字で同じく、上象鼻の字数や刻工の陳寿の名が記され、本文中に「御名」等の避諱もある。刻葉は卷二からで、首題は「咸淳臨安志卷之二」。

左右双辺（二六・四×一八・二_{センチ}）、一〇行、二〇字・注文小字双行。版心は白口で、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名、題を「咸淳臨安志卷幾」と刻する。刻工名は

4 尤有明 尤明 毛梓 王真 王春 王珪 王瑞
6 江輝 7 吳文煥 李斗文 沈祖 8 金珪 9 范仲実 10 徐璟叔

5 必昌 翁文 翁文虎 馬士龍 11 張中 張興祖 曹必貴
梁建 梁貢甫 盛允中 盛中 郭世昌 陳日升 陳永昌
陳松 陳政 陳茂 陳德達 12 黃文彬 13 詹週 14 趙榮祖
15 德達 潘必昌 蔡光大 16 興祖 17 鍾桂異 韓王

この刻工が合致する本は多くはないが、二人以上合うのが湖州趙氏宋宝祐五年序刊の資治通鑑紀事本末の五名と、宋紹興七、八年湖州刊の新唐書の三名である。すなわち前者と同名のものは王珪、王春、沈祖、范仲実、梁貢甫であり、後者と同名のものは王真、王瑞、王春である。同じ湖州の刊であるが、後者は南宋初であるから、咸淳臨安志とは関係があるわけはない。しかし通鑑紀事本末とは五人が一致し、その刊年の宝祐五年（一二五七）から咸淳元年が八年後であるから、かれらはほぼ同一人で、臨安志もその冠称の通り咸淳刊とみてよいと思われる。

ただし本文には咸淳七年（一二七一）の記事があるから、それ以前ということはありえず、その後の三年間の刊となる。

避諱欠筆は稀に 攷啓 にみられるにすぎず、例外的に版心の刻工名の郭（世昌）の一例がある程度であるが、帝諱に当る文字は次掲のような注記に替えられている。まず本文に、「楊

子平同県人名／犯／今上皇帝御名子平其字也」(巻六七第七葉裏一〇三行)と書くような場合がある。ついで小字双行の注とされている例を表示する。下方の数字は、見落しもあるうが、また補写と欠巻の一六巻を除くが、その回数である。

聖祖／諱	5	犯／皇帝御名	1
犯太祖／廟諱	1	御／名	24
英宗／廟諱	1	御旧／名	17
犯 欽宗／皇帝旧諱	1	犯秀安／僖王諱	2
犯 高宗／廟諱	1	廟／諱	89
孝宗／旧名	2	名犯／廟諱	1
光廟／嫌諱	2	名犯／御諱	1
犯／光廟諱	1	廟嫌／諱	1
犯 寧宗／皇帝廟諱	1	二字／廟諱	2
理宗／嫌諱	1	二字／御名	2
宗／嫌諱	1		

補写のところに「犯／真宗諱」もあって、歴代の帝号が列举され、とくに南宋が多くて理宗に至る。刊行の咸淳の度宗については、本文に今上皇帝と称したほか、御名、旧御名というのがそうである。

廟諱、御名、御旧名の例がきわめて多く、これらの文字を一一特定するのはたいへんな作業であるが、幸にこれをあえてした労作が存する。清道光一〇年錢唐汪氏振綺堂刊本(仿宋本重離と称する、欠巻六四・九〇・九八・一〇〇)である。巻末の汪遠孫の跋によれば、吳春照、黃士珣と三人で一八箇月をかけ、咸淳に先んじる乾道・淳祐の臨安志や、夢梁錄、成化の杭州府志、その他の地誌や史書等を用いて校合した結果であるという。これらは本文のうちに正字に訂されているが、そのごく一部は、校葉咸淳臨安志札記三巻に校勘記の形で例示されており、さらにその前の黃士珣の札記序に、咸淳臨安志の避諱の形式が次のように纏められている。

避諱難以枚數避諱及貞徽、避諱及樹堅、又不一例、有不出本字者注廟諱、有、篤作從竹從均有作上某下某者置作上、下且、有去偏旁者恒為康、援為爰、有欠筆者啓、有作從某者改字者

そこで右に表示した双行の注による避諱をこの本を参照して本文に当たると、もっとも多い「廟諱」八九のうち四一が英宗の嫌名の「樹」で、同じ「署・堅」が三、「敦・嗽・漱」が八、「構・勾」が八、「懸」が四、「蜃・慎」が四、「桓完純」が四、「啓」が三、「玄讓微拙馴勻」等が一、二例ずつある。

また「犯太宗廟諱」のように帝号の明記されたものには「胤樹 宜 璦 筠 僞」等の字がある。

地誌には頻出する文字と少いものがあるが、英宗の嫌名の樹があまりに多いのは異例であり、一方で寧宗の嫌名の郭は人名を主になりに現れるが、前述の通り刻工名と廟嫌諱との各一例のほかはほとんど欠かない。弦眩絃敬驚警弘殷竟境等もあまり避けず、文字によってむらがある。

今上の度宗は淳祐六年に孟啓、同一一年に孜、宝祐元年に禧と改名した。したがって「御旧名」とあるものは啓であり、孜も少いが欠画している。「御名」の大半は汪氏らによれば旋または璇とされているが、宋史本紀等にその記事はみえず、汪氏刊本の札記も御名未致としている。

ところで、清の周広業の経史避名彙考卷二一（清嘉慶中撰 四六 卷末刊稿本を一 九八一年 台北 明文書局が影印）度宗の條に、度宗の諱に叡があり、叡と璿は同音で、旋は美玉のことであるから意が通じ、叡璿はあるいは旋璿に作るものであるという。

宋も余命幾許もない最末期の刊であるが、臨安府の刊であるうから、匡郭も大きく、字様もかなり堂々としており、また詳述したように宋諱欠筆もなかなか凝っている。

卷六五・六六の補写について、卷六六末に「具免牀家藏鈔本影写凡二卷／嘉度庚申（五年）四月（願）潤齋記」の二行があり、この二巻は標記の他の補写の一〇巻とは別筆である。これら補写巻のほかは卷一四第一二葉（二三葉以下欠）、四一一一八、六九一六、七一―一が補写。また卷六二第一葉表、九一一・二が欠葉。

蔵印は「高平／家蔵」「朝列／大夫／之章」（陰）、「汪印／士鐘」（陰）「閩源／真賞」、「田耕／堂蔵」「泰峰／審定」（陰）、「歸安陸／樹声叔／桐父印」（陰）。

又 残本（存卷二七第一・二葉、二八―九―一一、四二―一二、六九―七―九、七〇―一・一二―二二、七一―一―五・七―一二、八三―一・一二―二七、八四（全）、八五―一―二五）「宋咸淳」刊「元」修

一冊

東京大学東洋文化研究所蔵

卷八三―八五の残六二葉が静嘉堂本の欠（補写）を補う。

静嘉堂本にみえなかった刻工に、徐用 陳子成 陳寿 章泳 詹泉がいるが、少くとも前二者は元修刻工である。このように元修が入っており、明に近い無界の修葉もある（八五―一八）。

同版本は北京図書館と南京図書館に存七八巻、九五巻の残本があるが、補写巻が多い。

咸淳臨安志に先立って、周淙によって乾道臨安志一五巻が、趙与鸞・陳仁王によって淳祐臨安志五二巻が編纂されているが、前者は巻一〜三の三巻、後者は巻五〜一〇の六巻のいずれも清写本しか現存しない。

重修毗陵志三〇巻（存巻七〜一九・二四） 宋史能之撰

〔宋咸淳〕刊 三冊

静嘉堂文庫蔵

後補香色表紙（三一・二×二〇・二センチ）、襖装。副紙の裏面に清の唐翰題の丁卯（同治六年・一八六七）十一月の跋とその追記があり、静嘉堂宋元版図録に移録されている。

本文巻首「重修毗陵志巻第七」。左右双辺（二三・五×一五・七センチ）。九行、二〇字・注文小字双行。版心 白口、双黒魚尾で、上象鼻に大小字数、下象鼻に丁付、中央の題は「志幾」。

巻一二第五葉以下が欠け、末葉だけは丁付を削去して存する。他に巻一〇第一九葉以下、巻一一第一葉が欠。

巻二四は首尾題および版心題の巻次「二十四」の「四」字をすべて剝去して、巻二〇に見せかけてある。このことについて

は陸心源が気づき、唐翰題の跋に「末一卷二十乃剝去二十以下字以配足者是書当有二十幾巻」とあるところに、「第二十巻是第二十四巻剝改存斎識」と傍記している。

刻工名はなく、宋諱も郭廓字までまったく欠画しない。ただ貞観を正観につくる一例がある。また語の宋朝に渉る場合は、必ず上を空格にするか、改行して抬頭する。

蔵印は「新豊郷人庚／申以後所聚」「鶴安／校勘／秘籍」「雲煙／拈弄」「小窓／雲月」（陰）、「婦安陸／樹声所／見金石／書画記」（陰）、「臣陸／樹声」（陰）、「婦安陸／樹声叔／桐之印」（陰）。

唐翰題の跋に、馬端臨の経籍志に鄒補之撰の毗陵志一二巻があるのを重修したものかという。四庫全書未収。同書には明王偁撰の毗陵志四〇巻と明朱昱撰の重修毗陵志四〇巻があり、後者はこの毗陵志と明洪武一〇年の謝応芳の続志一〇巻に基いたとする。

北京図書館にこれとまったく行格の同じ二九巻（欠巻二〇）一二冊があるが、明初の刊本と著録される。なお、明の成化中にも孫仁・朱昱撰の毗陵志四〇巻が編まれたが、これも刊本は少いらしい。

金陵新志一五卷 元張鉉撰 元至正四年（一三四四）集

慶路學刊 一六冊

靜嘉堂文庫藏

後補淡茶色表紙（三〇×二〇・三センチ）、襖装。

甲申（至正四年）索元岱の序は補写。同年の集慶路総管府の抄録修志文移、台府提調官掾職名、台府官掾職名、張鉉の修志本末、新旧志引用古今書目、金陵新志総目と続く。

卷一首は「金陵新志卷之一」と題するが、初葉は金陵山川封域総図（左右双辺二六・四×一七・三センチ）のため、その右肩に耳格（ハ×一センチ）のような形であり、裁断の際にはみだしのために内に折りこまれている。本文は同じく左右双辺であるが、九行、一八字・注文小字双行。版心は白口で、双黒魚尾、「金陵新志卷幾」と題し、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名を刻する。刻工名は、朱君 朱俊甫 朱成 吳君祥 陳君佑 錢甫、単字で中朱成子涉之明仲陳正施尹張仁錢劉新吳焦施后。

補写葉が地図、本文ともかなりあり、卷一第一・六〇葉、一〇・二〇・二二・三八・四一・四六・五三・五七・六〇葉、三上―八八・九一、三中―五・六・一五・一六、五―四、六一九五、一三上―四三―四四、一四―七など。卷一三第一〇二葉以下を欠く。

卷末尾題「金陵新志卷終」。その次行に「右金陵新志首図考終

論并共卷拾伍／卷」、そして「本路提調司江子澄」以下、左の二一名の官衛が一二行にわたる。「本路儒学教授王之孫／学生方

自謙 学録陳觀／訓導丁復 婁章／林燾 胡嵩／朱遂 吳益／督刊司書掌版鄭懋／知書陳祥 曹志仁／編写生員劉溟 呂益／徐震 翟庸／鄭英 趙天禄／李夔 趙天寿」。

版木はやや漫滅し、南雍志経籍考にも著録されるが、まだ明修葉はほとんどないとみられる。

卷九学校の条に、兵火で散失した四部の書を集めてほぼ備えたとし、史・集部を主に一六書の名を挙げている。その中心は大徳九路儒学刊十史のようであるが、そのあと集慶路儒学と西湖書院蔵の版木が合わされ、それが明の南京国子監に引継がれ、南雍志に至るものと思われる。

同版本は台北の中央図書館に二部、同北平蔵に二部、北京図書館に三部、南京図書館に二部、上海・北京大・南京大図書館に各一部が蔵されるが、原刻本の多くは残・零本で、完本はほぼ明修本である。

二冊

静嘉堂文庫蔵

後補藍色表紙(三四×二二・二^ナセンチ)、粘葉装。題簽「幽蘭居士東京夢華錄 一至五卷(六至十卷) 上(下)冊」、下冊にだけ巻次と冊次の中間の左側に「孫延題簽」と、いずれも墨書。孫延、字は寿之、清の呉興の人。やや厚手の大型の台紙を粘葉装とし、これに本文料紙(半葉二七×一八・三^ナセンチ)を見開きに貼付してある。副紙に古い題簽が貼られ、「元本幽蘭居士東京夢華錄」と墨書し、「江/夏」「無/双」の二小印を捺す。この葉の中央には「黄印/丕烈」(陰)「堯/圃」印。

次葉に黄丕烈の手跋二則があり、一は嘉慶五年(一八〇〇)から二年のもので、前後に「士礼/居」「堯圃/過眼」(陰)「黄/丕烈」(陰)が捺され、二は道光三年(一八二三)のものである。その第一に、顧氏から張氏に移譲されたが、「裝潢精妙、楮墨古雅、板大而字細、人皆以為宋刻。余独謂不然、書中惟祖宗二字空格、余字不避宋諱、当是元刻中之上驕、至於印本当然在明初」と識すから、副紙の古い方の題簽は黄丕烈以後ということか。これらの全文は図録の解説に収載。

首に夢華錄序。紹興一七年(一一四七)孟元老。崇寧二年(一一〇三)に京師に到ったというが、この撰者のことはこれ

以上にはわからない。次で幽蘭居士東京夢華錄目録二葉。

「幽蘭居士東京夢華錄卷之一」。孟元老の名は序にしかない。左右双辺(二一・七×一五・三^ナセンチ)、一四行、二二字・注文小字双行。版心 線黒口、稀に小黒口、双黒魚尾、「夢華錄卷之幾(丁付)」と題し、下象鼻に稀に刻工名。刻工は、一良 呉明 姚宏と単字で丁元名明姿魏。呉明の名は大徳八年(一二三四)序刊の元豊類稿にもあるが、一例だけでは参考にならない。「祖宗」の上を空格とする(卷一末行)。

目録第二葉、卷三一二、七二三、九一二葉などは公牘紙の紙背が用いられ、わずかに「本班教廖」「論語」等の文字がみえる。これについて黄丕烈の第一の識語には、「有本班助教廖、崇志堂西二班学生翁深、学正江士魯考訖、魏克讓考訖、正義堂、誠心堂西二班民生黄、刷卷、遠差、易中等、論語、大詰云々。雖文字不可卒読、而所云皆国子監中事、知廢紙為監中冊籍也」とあり、明印の根拠としている。「」内の句点の大半は黄丕烈のもので、おそらく公牘紙の文の改行を示すものと思われる。

尾題「幽蘭居士東京夢華錄十卷終」。

卷末に淳熙一四年(一一八七)趙師俠の後序がある。

明の顧元慶（一四八七—一五六五）の旧蔵で、その蔵印がい

くつかあるが、押捺の位置から推すとそれに先行する印がある

かにみえる。「諸氏／丘夫」^{（陰）}「諸氏／丘夫」^{（陰）}「諸氏／

之印」^{（陰）}「忠義／伝家」^{（陰）}「清胡／居士」^{（陰）}「顧氏」^{（陰）}「顧印／元慶」^{（陰）}

「吳郡顧／元慶氏／珍藏印」^{（陰）}「大／有」^{（陰）}「易山草堂」^{（陰）}「夷白／

齋」^{（陰）}「荆溪／世家」^{（陰）}、巻頭副紙と識語の黄丕烈の三印、「徵／

印」^{（陰）}「鏡／汀」^{（陰）}（申啓賢か）、「汪印／士鐘」^{（陰）}「閩源／真賞」^{（陰）}、

「江南／布衣」^{（陰）}（程邃か）、「筆研精良／人生式楽」^{（陰）}、「帰安

陸／樹声所／見金石／書画記」^{（陰）}、「静嘉堂現蔵」の諸印。また黄

丕烈によれば、夷白齋は同郷（吳郡）の陳基かという。

静嘉堂秘笈之三として一九四一年に影印された。また、入矢

義高・梅原郁訳註 東京夢華録—宋代の都市と生活—^{（岩波書店刊一九八}

三）にも全葉の写真が掲載され、詳しい解題が付されている。

同版本一冊が北京図書館に蔵される。明刊本は二種存し、一

はこの元版と行格が同じ、他は弘治一七年（一五〇四）刊の八

行一六字本である。北京図書館の明抄本には、やはり黄丕烈が

跋を書いているという。

廬山記五卷 宋陳舜俞撰 〔南宋前期〕刊 五冊

内閣文庫蔵

後補淡茶色表紙（二三・九×一七・四^{センチ}）、題簽は墨筆で「廬

山記 仁（義礼智信）。

地図一葉があつて、廬山記目録、次でこの書の出版に尽力し

た李常と、撰者とともにこの地を歩いた劉渙の序がある。序よ

り目録が先行するが、丁付がこの順で通してある。

「廬山記巻第一／^{（三格）}尚書屯田員外郎嘉禾陳舜俞令舉撰」。

左右双辺（二一・二×一五・二^{センチ}）、九行、一八字・注文小

字双行。版心 白口、単黒魚尾、題は「記幾（丁付）」、下に

刻工名。丁付は目序からの通しである。刻工名は、小范 吳恭

吳渭 阮宗 宣開 范宣 趙祐と単字の右吳周宗祐渭趙。

刻工七名のうち他の宋刊本と名が合うのは阮宗と吳恭だけで

あるが、紹興前半の明州刊文選、白氏六帖事類集（梅沢記念館

旧蔵・天理図書館現蔵）、周易正義（単疎本）、豫章黄先生文集

と、すべて南宋前期の刊刻に携った者である。このような少数

の合致例で即断することはいけないが、異例がないこと、次の

避諱欠筆、それに字様とを併せみれば、南宋前期、おそらくは

紹興中（初期）の刊と推定される。

欠画は 玄眩絃鉉朗 擎驚 弘泓殷 匡竟境鏡 恒 禎貞 徵 署 樹

讓桓洄完、さらに桓を「犯湖聖御名」の例がある（卷三第八葉表六行）。欠画を補筆したために、影印本ではわかりにくい場合がある。

「佐伯侯毛利／高標字培松／藏書画之印」、「秘閣／図書／之章」印。

日本には次掲のもう一本があるが、中国には同版本はなく、わずかに三巻の清抄本が存するにすぎない。これとは別に元禄一〇年刊の五巻本があり、明初刊本に拠ったかといわれるが、本文はかなり異なる。重要文化財。一九五七年に影印された。

又（卷一・四・五補写） 五冊

お茶の水図書館（成篋堂文庫）蔵

未見。

三巻の補写は室町初期に行われたものとされ、白界（一八・一×一五チセン）、宋版と行格を同じくしようとしたらしいが、すぐに字詰にずれを生じ、また字句を脱して行間に補った例も少くない。首の地図と目録（宋版は各一葉）がなく、李常の廬山記序から始まるが、その欄外左上方に「三丁」と丁付を記入する。宋版もこのように版心に巻一末まで丁付を通すが、これに

従ったらしい。本文の字句もほぼ異同がないといわれる。

巻一末に「一校了於字莫改本品方木也」、巻四・五末に「一校了於字莫改」の各一行があり、本文ともどもいずれも同筆になる。一部に朱句点を加え、校正注記の紙片を挿む。巻一第二葉、巻四第二一・二八葉は欠。

巻二・五首と巻四首とに二種の「高山寺」印を捺すが、偽印かといわれる。

巻五末に羅振玉手跋二葉、各冊や帙の題を氏の手になり、氏の書簡が寄せられている。一方、蘇峰も由来記、清刊の東林一八高賢伝、宋本廬山記を読む（国民新聞切抜帳）等を添える。一九一七年、吉石盒叢書二集に影印。

いま、川瀬一馬氏の新修成篋堂文庫善本書目の解題と影印本に拠る。

大唐西域記 零本（存卷一〇～一二殘葉） 唐釈玄奘訳

釈弁機撰 「元」刊（大藏經） 三帖

京都大学人文科学研究所（松本文庫）蔵
表紙は三帖とも欠落しているが、本文料紙の一折が二八×五・七チセン、折帖。全一二巻のうち巻一〇（疑第二函）が存第

一〇四・一一・一二葉、卷一一（疑三函）は存七・八・一一・一二・一五葉、卷一二（疑四函）は存五〇二三葉・附音釈。虫損もはげしく、三帖ともばらばらの状態にある。

本文首題「大唐西域記卷第十（隔六格）疑二ノ（低六格）三藏法師玄奘奉 詔訳ノ（同）大総持寺沙門釈弁機撰」。

天地に单边（高さ二四・六_{チン}）、無界行一七字注小字双行。一折六行、一紙五折。

各紙右端の糊代部分の中六_ミリほどが黒口であるが、その上方約四_{チン}が白口で、「西域記」と題し、第一、二折の折目の上方に「疑二」の千字文号、下方に丁付と刻工名を刻する。

刻工名は何周全。

尾題「大唐西域記卷第十二」の後に、音釈が二葉ある。

「松本文庫」印。

宋元の各種の大蔵経のうちに大唐西域記もかなり多く含まれているが、単独で蔵されているから取りあげた。

政書類

通典二〇〇卷（欠卷四二・一一九・一二〇） 唐杜佑撰

〔北宋〕刊〔北宋〕修（目錄 卷二一〇一一八・

一七五・一九六〇二〇〇補写） 四四冊

宮内庁書陵部蔵

改裝後補葡萄酒草文空押淡褐色表紙（二六・七×一七・五_{チン}）、外題は双郭（外郭一五・六・三・三_{チン}）とその内に「通典」と彫った木印を捺し、郭内のほぼ中央に「卷一之五」のように五卷ずつの巻次と、下方に「此様四十」と本来の冊数が墨書される。

首に進通典表一葉、「貞元十年 月 日表上」の日付がある。次に李翰の通典序が一葉。

本文は「通典卷第一ノ（低一四格）京兆杜 佑 字君卿纂」の題のあと、自序が九行あって、食貨典第一の目録が四行、そして本文に入る。全巻の詳細な目録はない。

左右双边（二四・二×一六_{チン}）、一五行、二六〇二九字・注

文小字双行三五〇三七字。版心 白口、書名を題さず「第幾冊

（丁付）（刻工名）」と刻する。五巻ごとに一冊に装訂され、

丁付は各冊五巻を通し、刻工名はごく稀にある。

一部に補刻があり、だいたい各冊二〇五葉程度であるが、第二冊（卷六〇一〇）はほぼ半分の二二葉に及び、また第一六〇二二冊にはない。北宋期の一一世紀中にすでに版木に漫漶が進

んでいたことを物語る。

避諱欠筆は、玄弦炫絃懸朗 弘泓殷 匡竟境鏡胤 恒 貞徵懲
と仁宗に及び、補刻葉にその次の英宗の父の讓字を欠く例がある
(卷六第一葉表一〇行)。刻工名は

3 小七 小注 小敵三 6 印頭 8 周祀 周亮 9 胡九 胡祐

胡遂¹⁴ 趙政¹⁵ 鄭希 鄭遂 敵肅

丁 安 何 吳 希 汪 貝 周 奉 迪 姜 徐 郎

張 許 陣 華 遂 絳 趙 錢 潘 廬 戴 顏 敵

(以上原刻)

¹³ 楊詢 八 牛 胡 許 蔣 沢 敵 (以上補刻)

原刻葉にすでに墨釘の箇所が稀にあり、補刻葉にもある。料紙が黄色というより茶褐色に変色し、こまかな斑点が一面に出ている葉が少くないのは、川芎の粉末を防虫剤に用いたためであるといわれる。卷三三第九葉(第七冊二七葉)、卷四一第一四葉・卷四二・卷四三第一第三葉(第九冊一四〇二六葉)、卷一四六第八葉裏(第三〇冊八葉裏)、卷一五一第五〇八葉(第三一冊五〇八葉)が欠葉である。

一部に青朱墨の三筆で句点・圈点・傍点・傍線が施され、行間および眉上に他本との校合の結果が記入されている。眉上の

ものはわずかに裁断されているが、無刊記の明版と武英殿版を対校に用いたと思われる。

原刊本の各冊に「経/筵」方印、尾に「高麗国十四葉辛巳歲／藏書大宋建中靖国／元年大遼乾統元年」長方印が捺されている。前者は李朝世宗二十一年(一四二九)(李朝太祖実録卷四三)、後者は印文通り高麗肅宗の辛巳歲(一一〇一)の印である。これらを押捺する本は、重広会史(尊経閣文庫蔵)、姓解(国立国会図書館)、新雕入篆説文正字(お茶の水図書館蔵)と三部が現存し、表紙もまったく同様のものであって、高麗・李朝の王府に伝えられた本と推定される。

目録以下の補写巻は、卷一〇九・一一〇が原刊本と重複するが、いずれも九行一七字の行格が朝鮮乙亥木活字本と一致する。蓬左文庫に嘉靖三十九年(一五六〇)の宣賜本があり、この補写も一六世紀後半に李朝で行われたものと思われる。

この北宋版をはじめ、以下の南宋版、元版、増入諸儒議論杜氏通典詳節については、通典の諸版本について(斯道文庫論集一四輯 一九七七年)、通典 北宋版および諸版本について(北宋版通典 別巻 一九八一年)、天理図書館蔵 宋刊本通典について(ビ

ブリア七五号 一九八〇年)、北京図書館蔵 通典善本について(稻・舟・祭松本信広先生追悼論文集 一九八二年)に詳述してある。

同 (欠卷三六〇・四〇・一四七・一五〇・一八四・二〇〇)

〔南宋初期〕刊〔南宋前期・同中期・元〕通修

(覆北宋刊本) 三六冊 天理大学附属天理図書館蔵

装訂と補修がはっきり異なる同版二種の取合本である。

A 南宋前期修 存一四〇卷 粘葉装 二八冊

卷一〇五・二六〇・三五・四一〇・一一一・一四五・

一五一・一八〇

B 南宋前期・同中期・元通修 存三四卷 綫装 八冊

卷六〇・二五・一〇一・一一〇・一四六・一八一・一八三

Aは後補紺色表紙(三二・一×二〇・五^チ・五^セ) (近年再改装)、

題簽には「杜氏通典^{共四十冊}_{一之五}」のように墨書されていて、旧改装

時には全卷四〇冊が存在したことを窺わせる。傳增湘旧蔵。北

京図書館にこれとまったく同じ装訂の僚卷、卷一一・一五の一

冊が現存し、同じく傳氏旧蔵であるが、氏は後に購得したらし

い。料紙は裏に「進齋」の文字の入った小鼎形印が捺され、紙

質は厚く、匡郭の周囲を豊かに残して、宋元明初の粘葉装はこ

ういうものかと偲ばせる美本である。明の晋莊王鐘鉉の旧蔵書の多くがこの装訂である。

首の進通典表は北宋版と行格が一致し、字様も似るが、北宋本になかった貞字の欠画がめだち、筆勢がわずかに固くなっている。続く李翰の序は、後半に北宋版より二九字を増やし、同じ一葉に収めながら行格を異にしている。

本文首題、次行の杜佑の銜名、本文の食貨典以下はほとんど北宋版とまったく同じく、両版を対比すれば、覆刻本であることと何の疑いもない。ただし欠画は北宋版の仁宗より後に及び、北宋では署樹讓勗桓丸瑗の諸字が加わり、南宋に入ってから構字に及ぶ。補刻葉は慎蜚字を欠き、中央研究院歴史語言研究所蔵の原刻本は同じ箇所を欠かないから、原刻の避諱は構字にとどまることになる。

避諱欠筆が刊刻の時期の上限を示すにとどまるのに較べると、刻工名はそれをより明確に限定する。これを南宋初期、同前期の原刻・第一次補刻に分けて列挙する。

3 于忠	于亮	于湛	子久	4 毛易	王允成	王旦
王成	王受	王昇	王政	王益	5 包正	包政
朱言	朱祥	朱礼	何全	余中	余仲	宋求

宋俅	宋道	李攸	李通	李懋	沈敏	沈紹
阮于	9 周志	周彦	周曄	宗通	9 俞光	俞忠
胡印	胡杏	胡李	10 徐三	徐宗	徐杲	徐明
徐珣	徐真	時明	11 崔成	章旼	章英	郭良
郭奇	陳狄	陳直	陳敏	陳然	陳達	陳椿
12 黃季常	13 董明	虞集	雍卞	14 趙亨	趙宗	趙実
15 蔡通	16 盧通	錢阜	18 藍通	20 嚴志	嚴常	21 顧諲

(以上原刻)

4 王中	王允成	王成	王昕	王政	王春	王敷
王璣	5 包端	6 朱允	7 何立	何澄	宋允	宋瑞
李才	李文	李正	李圭	李沚	李恂	李政
李時	李益	李師正	李師順	李詢	李憲	沈仁学
8 周用	周彦	金茂	9 施寔	洪坦	洪茂	洪新
洪源	10 孫付	徐全	徐高	張用	張謹	陳文
陶忠	13 葉允	葉俊	14 趙旦	15 劉文	劉志	潘亨
蔡通	16 錢正	20 嚴忠	21 顧澄			

(以上補刻)

このうち王允成・王成・王政・周彦・蔡通の五人が双方に共通するが、前二者または三者は同一人かもしれない。

さて、これらの刻工は原補刻とも南宋初期ないし前期の刊本

にしばしばみえるもので、中国版刻図録の解説にたびたび採録された名も多く、その表現をまねれば「皆南宋前期杭州地区良工」である。したがってそれだけで南宋前期刊・同修としてよいのであるが、ここではもう少し厳密を期して、その期の刊年のほぼ明らかな諸書の刻工と比較しておきたい。次表はその結果を示したもので、通典と各書との同姓同名のものの人数を掲げてある。

中央部のゴチック体の数字の、上段「原」が通典の原刻刻工・下段「補」が同補刻刻工とその書の刻工と同名のもの的人数である。

巻数は宋版の存巻数で、欠・補写・別本補配等の巻数を省いてある。

欠筆は、もっとも後代の帝諱を挙げた。

所蔵者は調査本を中心に代表的な各一箇所とし、図書館・文庫の称を略した。

書名	刊年	刊地	原	補	欠筆	所藏
思溪円覺藏經	紹興二年	湖州	9	2	大谷大	
(新)唐書	紹興七年	湖州	8	1	禎靜嘉堂	(百衲本)
文粹	紹興九年	臨安府	13	2	構北	(中国版刻図銀)
漢官儀	紹興九年	臨安府	3		溝北	(続古逸叢書)
毛詩正義	紹興九年	紹興府	4	2	構杏雨書屋	(東方文化叢書)
文選	紹興	明州	6	1	構足利学校	
外台秘要方	紹興	紹興府	6	2	完靜嘉堂	
(旧)唐書	紹興	紹興府	9	3	構	(百衲本)
(新)唐書補刻	南宋前期	湖州	4	1	構	
史記	南宋前期	兩淮江東 轉運司	1	1	慎北	
漢書			7	11	慎	
後漢書			5	3	慎北	
史記(索隱)	淳熙三年 同八年修	桐川郡	2	11	慎靜嘉堂	
文選		贛州	4	6	慎靜嘉堂	
尚書正義	乾道淳熙	紹興府	1	3	構足利学校	
礼記正義	紹興三年	紹興府	1	5	敦足利学校	
論衡	南宋前期		0	3	構書陵部	

一見して、原刻刻工は紹興九年（一一三九）前後を頂点として紹興刊本と大いに共通し、乾道・淳熙（一一六五～一一八九）に至って減っている。一方、補刻刻工は紹興中には散見するにすぎないのが、淳熙になって増加して紹熙に至る。すなわち、紹興刊・乾道淳熙修とみてほとんど誤りないと考えるが、念のために「南宋初期」刊「同前期」修とっておく。

卷一四五の尾二葉（第二九冊第四五・六葉）が欠脱している。

蔵印は、毎冊の首に「晋府／書画／之印」、尾に「敬徳／堂図／書印」「子孫／永宝用」の二印が捺され、首にはまた、上方の晋府印に対して下方に「薛玄／卿印」と、その上に「朝／陽」印を重ね、とくに第一冊首の進通典表の葉はその尾にあって、「洞玄／冲靖／崇教／真人」印と重ねられている。さらにごく稀に「沔／弔」印がある。

薛玄卿（至元二六～至正五・一二八九～一三四六）は、元の中後期の道界の重鎮の一人で、至正三年に弘文裕徳崇仁真人・佑聖觀住持を授けられ、杭州の諸宮を領した（元黄潜 弘文裕徳崇仁真人薛公碑 金華黄先生文集卷二九所収）。洞玄冲靖崇教真人は別人と思われるが、朝陽・沔弔印ともどもわからない。晋府印は明の晋莊王朱鍾鉉の蔵印

といわれるが（蔵書紀事詩卷二）、かれは洪武帝の第三子で晋王に封ぜられた恭王綱の曾孫で、正徳七年から弘治一五年の死去まで（一四四二～一五〇二）晋府にいた。

そして、傅増湘が一〇数種の蔵印を組合わせて押捺する。それは基本的に「蔵園／秘笈」と「雙鑑樓／収蔵宋本」の二印を縦に、それが無理な場合は横に並べ、その上方に次のうちの二印を捺す形式である。「傅／増湘」（陰）「増湘／私印」（陰）「沔／叔」「沔一叔」「沔叔／蔵書」「傅沔叔蔵書記」「沔叔／察定」「蔵園／居士」「雙鑑樓」「精龕／精舎」「萊娛／室」「長春／室主人」「書／潜」。

校宋本通典跋によれば、庚申の年の夏、すなわち民国九年（一九二〇）、傅氏は南游して江蘇省揚州宝応の旧家で、この通典二八冊を入手した。氏はこれを北宋本と信じ、ついで、宋翻残本、すなわち次に述べる同版で補刻がさらに南宋中期・元と増えるB本を得、A本の欠卷六〇卷のうちの三四卷をこれで補って、現在の形に仕立てたものである。傅氏はただちに無刊記の明刊本との校合を思いたち、中国が政変期であっただけに足掛け九年を要して、ようやくそれを果した。その結果、校宋本通典跋が書かれたのであるが、この間の事情を次のようにい

う。

時閏九年、時事之變遷劇矣。外而朝政之翻復、内而家族之喪亡、所歷駭心怵魄、勞神摧志之境、殆非人所堪。

校勘によって傳氏は宋本の価値をあらためて再認識したが、その作業の間に構脊、慎、蟬などの南宋二帝の避諱欠筆に気がつかなかったとは、とうてい思えない。氏は遂にこれを南宋本とは言わなかったが、経眼録には紹興刊本とされる。またこのとりわけ愛蔵した本の行格についても、双鑑楼善本書目・校宋本通典跋ともに、半葉一四行と誤記しつづけていた。

第一冊末(卷五)に、

光緒乙巳冬見朝鮮國庫所藏有大遼統和二十二年使臣購入題字者於東／瀛當時默者神劍歸吳之祝越今十有六年矣煥略神明頓還旧觀則又不能無延／津重合願也余齋老人觀記庚申五月晦日(癸厘)(印)

との識語がある。傳氏の手中に帰す直前のもののようで、余齋老人すなわち沈曾植が光緒三十一年(明治三八・一九〇五)に図書寮で北宋本を見、一六年ぶりにこの本を見て感激しているようであるが、大遼乾統元年であるべき年号・年代はじめ不正確で不審な点が多い。

B本七冊は、改裝後補金切箔散濃綠色表紙、襯紙を挿み、包背裝で、題簽はない。A本と同版で、傳氏のところで取合されたのであろうが、版面はいよいよ慢漚し、原刻葉の残存はほとんど認められず、A本の南宋前期に加えてさらに二度にわたって補修が入っている。

第二期および第三期修の刻工はつぎの通りである。

2 丁之才	4 方至	方信	王成	王明	王信	王宝
6 朱明	4 朱玩	朱益	7 何昇	何沢	余政	余敏
吳春	吳益	吳祐	宋通	本宝	沈定	沈思益
沈祖	8 周成	周明	10 凌宗	夏又	徐仁	高異
11 張允	張明	張垚	張堅	盛吳	陳思義	陳晃
陳彬	陳寿	13 揚顯	董辰	詹世榮	15 劉仁	劉照
16 錢裕	17 応拱	20 敵智	21 顧永	(以上第二期)		
4 方得	王 5 占	永 用 6 圭	成之 7 李宝	8 沈 芦 9 胡 政		

10 凌 翁 11 張 祥重 12 勝 貴 14 寿 15 褚 (以上第三期)

第二期修の刻工は、紹熙三年(一一九二)跋刊の八行本の礼記正義、乾道淳熙間刊の同じく尚書正義、慶元六年刊の春秋左伝正義、開禧二年跋刊の石林奏議、嘉定三年刊の中興館閣録、同五年跋刊の歴代故事と欧公本末、同一二年刊の渭南文集、同

一四年(一二二〇)序刊の儀礼経伝通解などの刻工と共通する。すなわち、紹熙(一一九〇)・嘉泰・開禧・嘉定(一二二四)ごろ、つまり南宋中期の補修である。この期の刊本、補刻本は、惇敦郭廓字をしきりに欠画し、版心上象鼻に字数を刻すようになり、特有な字様を備えていて、刊年を示さないものを含めるとその伝存本の数は相当に多いが、それらと刻工がかなり一致するのである。

第三期修葉は量的には少く、刻工名もほとんど単字で比較できないが、宋末元初の補刻かと思われる。

巻一四六はわずか首九葉が存し、表紙は剝れ、綴じられてもいないで、たまたま裏表紙を欠いたA本の第二九冊の末に添えられた形で、この一冊に合して扱われ、現在は独立させられていないようである。校宋本通典跋はこれを数えないで宋翻残本(B本)を三三卷七冊とし、雙鑑樓善本書目はこの巻を欠巻とし、天理図書館の諸目録・書誌もこれらに準じている。しかし、巻一四六からの五巻は本来、第三〇冊であり、この巻の半分に近い九葉が現存し、第二九冊(巻一四一〜一四五)とは装訂も修・印も異なるB本であるから、そしてそれに合綴されているわけでないから、単独に一冊として著録すべきであり、ここ

ではそのように取扱う。

この本には、蔵園と雙鑑樓の二印が捺されるにすぎず、A本の多彩な蔵印に較べるとあまりに寂しく、傳氏が兩本の価値の相違を痛感していたことがわかる。

同版本は北京大学図書館の残八八巻、北京図書館の二三巻をはじめ、一〇巻未滿の零本が中央研究院歴史語言研究所に二部、北京図書館に他に二部、上海図書館に一部ある。このうち北京図書館の一の巻一一〜一五の五巻一冊は、この天理図書館のA本の僚巻である。表紙、装訂、料紙、補修、蔵印等まったく同じで、やはり傳氏の旧蔵であるが、氏が一九三〇年ごろに現天理本を手離した後に、この零本一冊を別途に購得されたらしい。天理本はいま、この五巻にB本が配されている。

同「元大徳二年」撫州路刊(巻一九〜二二・六一)

六五・八一〜八五補写) 四八冊 静嘉堂文庫蔵

補写が計一三巻、したがって元本は一八七巻存する。

後補金切箔散青色絹表紙(二九・二×二〇・五センチ)、金鑲玉装。

首に李翰の通典序、ついで九典の名称と巻次を示すだけの通典目録があるが、ともに破損が甚しく、裏打のうえ補写してある。季振宣（一六三〇）の印記は損傷し、袁延壽（一七六四）一八一〇の印は補修の上に捺してあるのが、その時期を窺わせる。進通典表がなく、新たに総目が掲げられるなど首目は宋刊本とやや相違するが、本文は同系統といってよく、宋元本の関係は明刊本や武英殿版に較べてはるかに近い。

版式は初行に「通典卷第一」、次行に一一格を低して「京兆杜（隔三格）佑（二格）字君卿纂」と題する。左右双边（二一・九×一六・一センチ）、毎半葉一四行、行二六字、注文小字双行。版心はすべて双魚尾をもつが、ほぼ五種の変化があつて、およそ巻次によつて分たれ、それぞれ字様に変化もあつて、撫州の各県学などに分離させた結果によると思われる。また一部に刊記、校記、跋文の類があるから、これらと刻工名とを含めて、刊行の経緯を考えてみたい。まず卷一〇〇末に、

通典一書、礼樂刑政備焉。学士大夫、所宜家置一通、以便
考索。而板廢已久、諸路欲刊弗克。総管錦山楊公、牧臨
川、兼董學事。既新美庠序、百廢煥興。迺命諸学院、協力
刊成、第旧本訛甚、且多漫滅、殊不可読。湖堂所刊、自廿

六至百、共七十五卷、区区点勘再四、凡正一千七百六十八字、刪三百二十三字、增三百八十八字、皆攷処所引經史伝記儀礼諸書、以本文參訂、改定其疑。未能明者姑欠之、非敢臆決、如金根也。尚恨、膚學諛聞、研覈不精、掃塵復生、亦未敢保其尽善以否、後有邪子才正、自不免一笈云。
丁未歲抄、後學湘中李仁伯中恕甫謹識。

との跋文がある。これによつて、おそらく大徳十一年（一一三〇七）と思われる丁未の歲に、撫州路総管兼臨川縣尹の楊錦山が中心となり、路内の諸学院が協力して通典を校正刊行することになったこと、底本とする旧本は訛誤多く、漫漶甚しく、卷二六〇一〇〇を受持った湖堂では經史などの原典にあたつて校正に嚴密を期したことが明らかにされる。

撫州路には臨川、崇仁、金溪、宜黄、樂安の五県があるが（元史卷六二地理志五）、各卷ごとに版心や刻工をみていくと、だいたいつぎのように二〇〇巻をだいたい六つに分けて、各県の諸学院に分担させたいことがわかる。

I 卷一〜二五・一〇一〜一二〇 臨川縣学

又山 旴城江玉山 旴江興甫 余益山 吳撰之 吳撰辰 李
元 宗英 張北 張永祥 黃宋恭 黃忠

卷一〇七末に「臨川県学教諭晏仲容 直学連元寿点对訖」の一行がある。

Ⅱ 卷二六〇一〇〇 撫州路臨汝書院

宋端 劉文 劉宗 繼祖

宋刊本と同じく五巻を一冊とし、丁付を一冊ごとに通算している。

大半の巻末に「撫州路臨汝書院新刊／山長湘東李仁伯校正」およびこれに準じる八種の校・刊記がある。また卷七九・一〇〇に「直学吳国珍監利」の一行がある。

Ⅲ 卷一二一〇一四〇 樂安県学

仁公 仁玉 仁吉 仁吳 仁翁 崇仁吳 崇仁胥 崇英

この二〇巻はほとんど崇仁□という名の崇一族によって彫られている。Ⅵの樂安県学刊の場合に似るから、同じとみてよからう。

Ⅳ 卷二四一〇一五〇 宜黄県

平心 茂山 茂思

版心にしばしば「宜黄」を陰刻する。

Ⅴ 卷一五一〇一七〇 不明

卷一五一〇一五（第三冊）、一六一〇一五（第三冊）は丁付を通算し、他は一巻ごと。

王永 仲元 有立 宋宗祥 宗英 黃有立

卷一五一初葉に「清原」の二字を冠するが未詳。

Ⅵ 卷一七一〇一七三 樂安県学

仁公 仁玉 仁吉 仁吳 仁翁 崇仁吳 崇仁胥 崇吳

版心に「樂安都学刊」と刻する。

卷一七四以下、版心が破損したり、故意に削りとったような箇所があつて不明。稀にわかる刻工名も略す。

李仁伯跋の丁未は、版式から元大徳二年（一三〇七）と考えられる。

結局、この通典二〇〇巻は、元の大徳一年に江西等処行中書省の撫州路総管府が、臨川・宜黄・樂安等の県学、および臨汝書院などに分離させ、刊行したものと考えられる。

臨汝書院では校訂に厳密を期したというが、各県のいくつもの書院に分担させたために、形式上にはかなり統一を欠いた。一本のうちに葉数を各巻ごとに数えるものと、宋刊本のように五巻を一冊として通算するものとがあるのもそうである。

卷一九〇二一・六一〇六五・八一〇八五の全巻のほかに、卷一九六第八〇一〇葉、一九九の九・一一葉・二〇〇の一・三・九・一一葉が補写されている。これらはきわめて精密である

が、冒頭に季振宜と袁廷燾の蔵印に触れて示唆しておいたように、清の中期、おそらく一八世紀中に行われたものとみられる。

補写は元明の諸刊本を対校した結果、明刊本三種のうちの無刊記本に拠ったかと推定される。

蔵印は、第一冊首に明の文徵明の「江左」「春草／堂印」(陰)と王寵の「古呉／王氏」(陰)、第一冊および目錄首に「季振宜／蔵書」序末にやや大型の「御史／之章」(陰)「季印／振宜」「滄／葦」第一冊および目錄首に「袁又愷／蔵書」巻一首に「袁印／廷燾」「五硯／主人」巻末に「蘇州袁／氏五硯／樓藏金／石／圖書」巻八以下数巻おきの首に「笠沢金／氏安素／堂書印」(陰)、そしてときに「帰安陸／樹声蔵／書之記」等である。

この元刊本は、他に台北の中央図書館に一一巻二冊、同北平蔵に一一葉一冊が現存するだけのようである。

増入諸儒議論通典詳節四二巻 (元末) 刊 一二冊

静嘉堂文庫蔵

後補切金箔散黒色表紙(二二・三×一五・五_{センチ})。

李翰の原序、杜氏通典篇第題旨と題して新唐書杜佑伝の抜萃

(小字双行)と杜佑の自序、次で増入諸儒議論姓氏、そして増入諸儒議論杜氏通典詳節綱目(目錄)、その末に「至元丙戌／重新繡梓」の双行の刊記がある。続いて新纂杜氏通典詳節図譜(歴代伝繼図・歴朝の世系図・紀年之図)。

首題は卷三まで「増入諸儒議論杜氏通典詳節卷之幾」、以下はすべて「新入諸儒議論杜氏通典詳節」である。宋紹熙五年挾善堂刊本(北京図書館蔵)は「新入」であったが、これを「増入」に改題しようとしたかに思われ、明刊本は更に「新刊増入」に改める。

左右双辺(一八・三×一二・四_{センチ})、一四行、二三字・注文小字双行。版心 線黒口、双黒魚尾、「(大小字数) 典幾 (丁付)」。ときに殷恒貞桓慎敦字の末画を欠き、また惇を小字の「御／名」に(巻一一第二四葉表末行)、勾を「太上皇／帝嫌名」に(巻一三第九葉裏第六行)代える。紀年之図に宋を「大宋」と称し、宋室に渉る語の上を空格とする。これらは宋紹熙五年刊本と同じく、その覆刻本であるからである。字様からみて至元丙戌(二三年・一二八六)の刊とはとも思えず、元末に降るものと思われる。しかし同年の刊本はまったく現存しない。この刊記は更に明刊本にも残されている。

藏印は「淡泉」「大司／寇章」「鄭印／端熅」（明鄭曉）、「垂／白」「蔣氏／家藏」「沈印／穀伯」「沈印／穀伯」（陰）「沈印／就似」「象／成」「樸邨」（陰）「樸／邨」（陰）「石／材」「帰安陸／樹声藏／書之記」。

通典二〇〇巻を大幅に刪略し、これにその記事に関する宋儒二人の議論約一四〇篇を挿入して、一〇冊余に圧縮した科挙用の受験参考書であろう。それは省略の部分に如実にあらわれていて、とくに兵・州部・边防の三典は通典にそれぞれ一五巻程度もあったものが、わずかに二巻ずつを割くにすぎない。全体として各典とも主要な部分を摘録し、あとはむしろ諸儒の議論と関連するところは残し、他は大胆に省いたという感が強い。ただしその諸儒については、南宋では呂祖謙はともかく、他に朱氏一門が入っていない。

また王国維の庚申之間読書記の増入宋儒議論杜氏通典によれば（觀堂外集）、杜鎬、孫洙、鄭少梅、馬子才の文集はすでに散佚したこと、巻一四・一六に引く蔡惇の祖宗官制三巻と巻一三の黄琮の国朝官制沿革は元代以来伝本がなく、とくに後者はその書の過半がここに引かれていて、宋史職官志に記述の薄い元豐以前の官制を伝えて貴重であるという。

又 一六冊

竜谷大学図書館蔵

後補金切箔散黄色表紙（二二・八×一五・六センチ）、襖装。
朱句点、圈点、朱引を施す。

「写字台／之藏書」等の印。

同版本は台北の故宫博物院、中央図書館（二部）、中央研究院歴史語言研究所、北京図書館（二部）、北京大学図書館等にある。

文献通考三四八巻 元馬端臨撰 元泰定元年（一二三四）

西湖書院刊 元後至元五年（一二三九）江浙等処儒学

余謙・「元・明」通修 一二〇冊 静嘉堂文庫蔵

後補淡紅色表紙（三一・七×二二・三センチ）、襖装。題簽はみ

ごとな篆書で「元槧文献通考 幾冊（印）」、陳鑾の筆か（冊次は

別筆）、印は「芙川張容／鏡心賞」（陰）。

第一冊の副紙（六葉）に明天啓と清同光年間の七人の手跋が識され、あるいは貼附されている。すなわち、天啓元年（一六二一）の李待問（「待」「問」印）、黄丕烈、道光二年（一八二二）の陳鑾（篆書・「陳／鑾」（陰）印）、許告（「鄒」（陰）「廷／

詰」「東邨／退叟」(陰)印、道光一四年(一八三四)の李兆洛
〔冬読／書齋〕(陽)〔兆洛／之印〕(陽)印、錢天樹(「錢印／天
樹」(陰)印)、道光二六年(一八四六)の季錫疇(「季／范卿」印)
の七則である。黄丕烈以下はみなこの本を美川の張容鏡のこ
ろで見ているから、年代が明記されていなくとも、道光中かそ
の直前の識語であろう。

至大元年(一三〇八)の李謹思の序は補写、延祐六年(一三
一九)の王寿衍の進文獻通考表(首葉補写)、抄白(至治二年・
一三三二)、馬端臨の自序が続く、文獻通考目録の末に隸書の後
至元五年の江浙等処儒學提舉余謙の叙紀がある。

ここに、元泰定元年に江浙省が西湖書院において刊刻した
が、その文に偽脱や逸版があったために、馬端臨の祠の志仁か
ら原稿を取り寄せて西湖書院で校訂を行い、ようやく梓行した
ことが記されている。旧京書影395には、「男鄱陽馬志仁点対／
婿番楊揚玄古益費山校正／奉議大夫饒州路樂平州知州兼勸農事
河東薛居信提調校正」の三行がある。しかしこの文では、この
際に一部を補刻したのが、全面的に改刻したのが、もうひと
つはつきりしない。が、大版、大部の書冊がまったく新彫され
たとは考えにくいから、通説に従って泰定元年刊とした。

卷一首葉は明修で、「文獻通考卷之一／(低二格)鄱陽馬
端臨 貴与 著」と題する。左右双边(二五・四×一八・三
センチ)、一三行、二六字・注小字双行。版心は粗黒口、双黒魚尾
で、「文獻通考卷一 一(寸付)」と題する。元版と思しい葉は
少くなく、ただし泰定の原刻か後至元の補刻かの区別がつか
ないが、いずれにせよ白口か線黒口、ときに上象鼻に字数、下象
鼻に刻工名を刻する。

おそらくは元末、明初、明前期ごろか、その後と三、四回の
補刻が入っている。これらが線黒口か粗黒口で、そのうちの明
前期の修葉と思われる一部に、といっても四、五〇葉に及ぶ
が、版心上象鼻を剝去している。特定の巻にやや集中的にある
が、ここには補刊年記はないはずで、何を何のために切取った
のか、その意図が理解できない。「成化十年／国子監重刊」と
上象鼻に刻する葉が二(卷三第四葉・三〇四―一四)あるが、
これは欠葉に補ったものであろう。次掲の書陵部本には成化一
〇年修葉が、首の目録だけで一〇葉あるのはじめ、ほとんど
毎巻に含まれているが、この本では右の二葉しかないからであ
る。またこれはともに左右双边であるが、成化修葉の多くは四
周双边であって、この点からも、明前期と思われる字様から

も、宛去されたのは成化の補刊記ではありえないのである。なお、残された下象鼻に刻工名はないが、唯一、丘安の名がみえる。

刻工名は次に列挙するが、元明修が数次に及ぶ後印本のため、泰定元年の原刻と後至元五年の修との区別がつけにくいから、やむなく元代の刻工を一括して表示した。なかに元末明初に降るかと思われる者がいるが、判別が困難であり、版心が白口であることから、ひとまずここに含めた。

3 大用	子明	子堅	子華	小唐三	山番	4 仁甫
元吉	文甫	王子仁	王元亨	王六	王文	王古
王正	王祥觀	王森	王富二	王德明	王統卿	5 世通
以方	付茂	付善加	可川	可原	古之	古賢
平山	正之	用之	田得	6 仲亨	任夷	朱仁
朱明	朱長二	7 何宗	何庚	何建	何慶	余良
余彦文	君仲	沈子英	秀郷	阮寧	8 周秀	周受
周東山	周明	周寿	周福二	周鼎	周顯	甸端
杭宗	林伯福	林茂叔	林茂実	和卿	青之	9 彦昭
施道	胡秀卿	胡君仲	范寿	10 倪平山	徐良	徐明
徐阿狗	徐德俊	翁子和	袁子寧	高顯	高顯租	11 張四

張用	張成	張君用	張虎	張昭	張德明	曹新
梁士元	章才	章宇	章德	陳士通	陳大用	陳子仁
陳子成	陳文	陳敬	陳義	陳榮	陳福	陳德全
12 傅茂	屠明道	智祥	湯景	湯景仁	華甫	雇恭
黃四崇	13 楊三	楊保	楊景仁	葉德榮	虞保	虞保山
虞寿	詹仲亨	14 寿卿	趙秀	趙海	趙德明	15 劉子明
劉子和	蔡元挙	鄭埜	17 繆士元	繆太亨	繆謙	薛士良
19 羅恕	20 蘇德裕	23 顯之				

このうち大用、子堅、子華、元吉、文甫、王子仁、王統卿、以方、付茂、古之、正之、用之、任夷、何宗、何庚、君仲、秀卿、周明、周福二、胡君仲、茂之、徐阿狗、張四、張顯、陳大用、陳子仁、陳福、傅茂、楊三、応華の三〇名は、原刻か後至元修かはともかく、元人であることは確かである。台北の中央図書館（北平）蔵の残九八卷三〇冊は、「晋府書画之印」等を捺すように明の晋莊王の旧蔵本で、元末ごろの堂々たる粘葉装であるから、まだ明修が加わっていない撫印清雅な本であるが（増訂中国訪書志 三二九頁）、そこに採録された刻工名と同名であるからである。

一方、このなかの左の二三名は一応は元とみたが、あるいは

元末明初ごろの補刻刻工であるかも知れない。その次に明初修として掲げる刻工は、版心が黒口であり、字様が明らかに異って劣り、さらに元大徳九路儒学刊十史のこのごろの補刻刻工に（正史宋元版の研究一四三頁）、またはその十史のうちの南史、北史などの明初の覆刻本の刻工として（同一四九頁）みえる名である。次の二二名の刻葉の版式は、これらに通じるところがあるからである。静嘉堂文庫宋元版図録は、この多くを明初修としている。王徳明、付善加、朱長二、余彦文、周受山、何端、林伯福、徐明、張君用、章才、陳士通、陳子成、湯景仁、黃四崇、虞保、趙徳明、蔡元挙、繆士元、繆太亨、繆謙、蘇徳裕、羅恕。

いずれにせよ、右表の刻工は元代あるいは元末明初の刻工として頻繁にあらわれる者たちで、とくに宋刊本の元修刻工としてよくみられる名である。たとえば南宋前期杭州刊の南北朝七史（いわゆる眉山七史）にこれらのうちの四〇名、同兩淮江東転運司刊の三史に二〇名、宋嘉定一二年溫陵郡齋刊の資治通鑑綱目に一七名、南宋前期刊の春秋経伝集解（八行一六字本・静嘉堂文庫蔵）に一六名、宋紹興三年浙兩東路茶塩司刊の資治通鑑目錄に七名、宋嘉泰四年新安郡齋刊の皇朝文鑑に六名（以下略）というように多数の者が、おそらくは西湖書院で元修刻工

となっている。しかしそれぞれの元修の時期が特定できないから、漠然と元修あるいは元末期初修ということになる。

元刊本を刻した例も多少あるが、その主なものを次表に掲げる。

大徳重校聖濟総録	大徳四年 1306	太医院刊	朱明 何庚
六書統溯源	至大元年 1308	序刊後至元三年 1337	張成 鄭埜
通鑑前編	天曆元年 1328	序刊	王統卿 翁子和 詹仲亨
国朝文類	後至元末刊 至正二年 1342	王徳明 林茂実 袁子寧	
玉海	後至元六年 1340	刊至正一一年修	王徳明 以方 寿卿
六書統溯源、国朝文類、玉海は刊刻されたものの内容不備で	慶元路儒学 1340	刊至正一一年修	王徳明 以方 寿卿

まもなく修刻されており、この文献通考と経緯が似ている。いずれも一四世紀前半の工人であることは明らかであるが、同じように原刻と補刻の区別がつかない。大徳重校聖濟総録と通鑑前編の七名が同一人であれば、それは原刻の可能性が濃いが、約六〇名のうちのそれだけでしかないわけである。

さて、明初修と明らかな刻工は次の者である。

巴友 丘安 汝敬 江子名 危寿 宗文 范双評 張名遠
張広祖 葉就

以後と思われる刻工名は略す。単字のものと同じ。

最終の卷三四八の第六葉から一三葉までが補字。欠葉が卷二第一・二葉、二五―二二、七十一―一九、七三―一八、九七―一、一二八―一三、一六五―一五、二八八―七、三二〇―二二裏、三一―一表とある。

蔵印が張容鏡のものを主に多数ある。「水月／真人」(陰)、「錢／穀」(陰)、「叔／宝」(陰)、「錢氏／蔵」(陰)、「錢印／天樹」(陰)、「天樹／印信」(陰)、「子／嘉」(陰)、「汲古／閣」(陰)、「方浴／司馬」(陰)、「軍曲／僦之／印」(陰)、「大吉／羊／宜用」(陰)、「張□／令印」(陰)、「曹溶／秘玩」(陰)、「鉏菜／翁」(陰)、「廷瑞／私印」(陰)、「張印／蓉鏡」(陰)、「蓉鏡／珍藏」(陰)、「夢盧／借觀」(陰)、「蓉鏡／私印」(陰)、「琴川張／氏小瑯／玕□□／蔵書」(陰)、「蓉鏡心賞」(陰)、「芙川／鑒定」(陰)、「希世宝」(陰)、「小琅嬛／福地／秘笈」(陰)、「平生減産為収／書三十年来万／卷余寄語兒／孫勤雒誦莫／令棄擲飽蟬／魚堯友氏識」(陰)、「芙川／珍賞」(陰)、「虞山張蓉／鏡鑒蔵」(陰)、「蔡純楠／図書記」(陰)、「郁印／松年」(陰)、「泰／峯」。

後至元五年に補修の叙紀を残した江浙等処儒学の余謙は、六書統、六書統溯源、詩学正韵、国朝文類等をやはり補刻したことで知られる。それでこれらの書とは一部の刻工が共通する。

又 (欠卷二六、三八・三四〇、三四八 計二〇卷)

至明成化一〇年(一四七四)・弘治一・二年(一四八

八・九)通修 一二〇冊 宮内庁書陵部蔵

後補工字崩文地花并文空押黄土色表紙(三五・三×二二・九センチ)、李朝で装訂されたものである。印刷題簽一雙郭に「文獻通考」、下方に冊次を墨書。左右に綴代の分各約一・七センチ広く裏打し、そこに貼付した形になる。

李謹之の序、自序、抄白、目録。目録は第三二葉表の卷三三九が終った第四行いっばいで切断され、その下方に「自第三百四十八卷至第三百四十欠」との墨書があつて、次に余謙の叙紀が貼り足されている。目録の卷三四八(最終卷)が尾頭を含めて第三三葉の第五行で終るから、それに続く余謙の叙紀がちょうど当てはまるのである。「欠」の墨書は筆であらうが、欠卷末二〇巻を繕うために目録をわざわざ操作したものか。

余謙の叙紀は右の通り。本文首葉は同じく明修葉。

版心上象鼻に「成化十年／国子監重刊(吏部重刊)」、「弘治元年(二年)／国子監刊(国子重刊)」等と刻する補刻葉がかなりあり、下象鼻に成化のものにはごく稀に「盛生丘安補録」などと、弘治のものにはほとんどに「監生桂経録」などと版下抄手

の監生の名がある。これらの葉の多くは双边である。すなわち、前掲の静嘉堂本より、成化・弘治の補修が加えられたもので、元の刻工各も識別できるものは激減している。

補写、補刻の葉が多く、これが南雍志経籍考に、嘉靖一〇年ごろの状況として「文献通考三百四十八卷 旧版多損壞模糊共双
面板七百四十一塊」とあるのに繋がると思われる。

補写が卷一三第五・一一葉、二四一八、四八一六、五一一五、五三一八、五七一六・一一・一二、五八一四、六七二六、六八一四、六九一五、七〇一一・三、七三二〇、七六一五、七八一七・八、八三一二、八八一〇、九四一五、一〇一三・一八、一〇二二、一〇八一二、一一〇一一〇、一二三一五、一二五一二二・二六、一一六一八、一一八一二、一九一二四、一二〇一五・一六、一二二一八、一二二一三・一九・二〇、一二九一〇・一三・一四、一三〇一九、一三八一五（有界）、一五〇一二、一五二一七・八、一七六一七・一三・一六、一七七一一五、一八四一二、一八八一五、二〇一九、二二二三、二二三一一、二二四一六、二二六一七、二二〇一六・七、二三三三七、二三五一九、二三七一、二三九一六、二四一一七、二四三一二、二五三一七、二五四一一〇・

・一八、二五五一三・一九、二五七一〇・二〇、二五八一三・二〇、二五九一一七、二六〇一六、二六一一三・一四、二六三一二、二六五一五、二六八一七、二七一一一・一六、二七二一一、二七五五・九、二七八一六、二七九一三、二八一六、二八三一四、二八八一〇、二九一一七、二九三下七七、二九六一七、二九八一五、三〇五一三、三一六一一、三一八一八、三二一六、三三二七・一四・一六、三三二一三、三三五一三、三三六一二、三三八一〇、三三九一七。

欠葉が、卷六第二一葉、九一二〇、二二一五、一〇〇一二三、一二九一八、一三〇一二一、一三二一〇、一三三一二、一三七一二・六・一一、一五三一二一、一五四一表、一六〇一五、一六一一三、一六四一七、一六六一三、一六八一二、一七九一七、一八〇一三、一八四一四、一九〇一六、一九八一四、二〇四一一・一二・一四、二〇五九・一一・一二・一四、二〇六一三、二一〇一二、二二一五・八、二五四一七、二七八一三・一三、二七九一二、二八〇一二、三〇四一一、三一三一二。

蔵印は「国／賢」「二泉精舍／蔵書之記」、「佐伯侯毛利／高

標字培松／蔵書画之印」、「秘閣／図書／之章」、「帝室／図書／之章」。

故唐律疏議三〇卷（存断簡卷一四第四・六葉） 唐長孫

無忌等奉勅撰 明法類說 断簡二葉 「元」刊 一冊

東京大学東洋文化研究所蔵

新補金切箔散濃紺色表紙（三三×一九・五_{センチ}）。粘葉装。一葉ごとに白紙を挿む。

故唐律疏議は、左右双辺（二〇・五×一四・九_{センチ}）。九行、一八字。版心 細黒口、双黒魚尾、題は「唐律卷十四（丁付）」、上象鼻の左側に字数、下象鼻の右側に刻工名具熊。

法史学者のいう元刻大字本で、岡野誠氏の教示によれば、同版本は残本零葉が北京図書館と上海図書館に存し、また大連図書館や傳増湘旧蔵の零葉など、王元亮の釈文と纂例を含めないで一五六葉が知られるだけであるという。このうち北京図書館には卷一五（存五葉）、卷二四（同）、卷二六・三〇（卷二七以下完存）と釈文（五葉）、纂例（六三葉）が、上海図書館に卷一一の一葉、卷二三の一四葉、卷一四の三葉がある。上海図書館本は料紙の質や大きさがこの東洋文化研究所本と似ており、とく

に卷一四は第一・三葉が存して、この第四、六葉にほぼ接続するから、実査の際にむろん直接に比較はできないが、あるいは僚卷が別れたのではないかとの印象を持った。

さて、本版のこの二葉は、四部叢刊三編の滂喜齋本（北京図書館現蔵）と行格が同じく、字様もよく似ている。この限りでは覆刻の関係にあるとみえるが、上象鼻の字数が異り、四部叢刊本には刻工名が入っていない。四部叢刊という影印本と本版の写真を較べると、覆刻であるとすれば四部叢刊の方が原刊かと思われるが（仁井田陞氏の中国法制史研究（後掲）の図版一二に両本の卷二九第七葉裏が左右に対比されている）、二葉だけの比較であり、四部叢刊本のこの葉の匡郭の寸法もわからないから、その可能性を指摘するにとどめる。なお、四部叢刊の滂喜齋本にはいま王元亮の釈文や纂例は附いておらず、前述のようにこの元刻大字本の北京図書館蔵本にはそれがある。ただ、ここではこの二葉にこれらはないから、標記にはこれを省いた。

この両本の刊刻の年代については、仁井田陞氏（中国法制史研究（道徳篇）と内藤乾吉氏（中国法制史（法と慣習・法と所収））との間で論争が行われ、ともに滂喜齋本の宋刊説は否定されたが、その論拠までは触れる余裕

はないものの、内藤氏はそれを元の延祐五年（一三一八）以後の刊と、仁井田氏はそれを元初刊、元刻大字本を泰定（一二三四）至順（一二三〇）ごろの刊と主張されているようである。なお、仁井田氏は旧北平や現北京の両版を実査されている。私はその仁井田説を尊重したいと思うが、それに前述の覆刻説と次掲の余氏勤有堂刊本に附刻された元泰定四年の劉貫の序を考えあわせる。その序は末尾に次のようにいう。

江西在声教漸濡之内、諸学經史板本略具、而律文独欠。予間請於廉訪使師公曰、礼刑其初一物、出礼入刑之論、固将以制民為義、而非以罔民為厲也。吾欲求故唐律疏義、稍為正訛緝漏、刊之竜興学官、以庶幾追還時會誦法之遺。公儻有意乎。公亟謀諸寮案、咸応曰諾。而行省檢校官王君長卿、復以家藏善本及釈文纂例二書、来相其役。公欣然命出公帑所儲没入学租錢、以供其費。踰月緒成。因執筆冠篇、而且以識公恤刑之本心、無往而不在也。

これは現存の資料をすべて結びつけようとする臆説であるが、王元亮所持の善本とは滂喜齋本と同版であり、この覆刻を行って釈文と纂例を附刻したということが、まったく考えられないことでもあるまい。本版は版式からみて泰定四年ごろの江

西刊本であっても、おかしくはないからである。

この故唐律疏議二葉の後に、明法類説とされる二葉が附綴されていて、東洋文化研究所の目録には、別に「明法類説残一卷」□欠名者撰」と著録されているものである。帙の題にも、明法類説という。

左右双辺（一七・八×一二・五_{センチ}）、一一行、二〇字。版心線黒口、双黒魚尾、題に「断」とあって、その第五・七葉であり、上象鼻に字数、下象鼻に明可の刻工名がある。

故唐律疏議卷二九・三〇の断獄篇に相應し、その本文と疏文数行に対して、低一格で「類説」と称して数行（三〇八行）を解説する。料紙は同じであるが、前の故唐律疏議二葉より匡郭が各二_{センチ}以上小さく、字様も異って細い。しかし、元刻本であることは確かであろう。文淵閣書目卷一四著録

同 存卷一〜四 元王元亮釈文・纂例 元至順三年

（一二三三）建安崇化余志安勤有堂刊 至正一年

（一二三五）重校印 一冊

東京大学東洋文化研究所蔵

新補濃紺色表紙(三〇・二×一八・二センチ)、金鑲玉装(料紙高さ二五・二センチ)。帙の題簽に「元板唐律疏義殘本」壬申辛重校 閩星文題(印)と墨書。印は「星／文」。

首に泰定四年(一二三二)江西等処儒學提舉柳贊(以下、貫とする)の序、その末葉裏面に「至順壬申五月印」の一行がある。序文の末尾は刊序となっているが、それはおそらく官刻に關すること、この余氏勤有堂のためのものではあるまい。しかし、柳序と至順等の七字とは同じ行書体で同時の刻とみられるから、至順三年の刊・印とみてそう標記した。あるいは泰定四年の刊序が相当するかも知れないが、前掲の元刻大字本か滂喜齋旧藏本かが先行し、それを建安の書店が逸速く至順三年に印行出版したことを示すのではないか。

次に泰定二年劉有慶の唐律抹子序(版心題)の末一葉(欠前五葉)。そして唐律釈文序一葉が続いて、その尾に「崇化余志安／刊于勤有堂」の木記があり、序文の末行と木記の中間に「至正辛卯孟春重校」の一行がある。中国版刻図録等はこれをもって元至正刊とするが、この八字は、釈文序、木記、さらには本文の字様が共通するのに対し、少しく異り、後に入木されたものと思われる。至正一一年(一二三二)は至順三年より約二〇

年遅れる。字様だけでなく、版木の亀裂の状況が入木を証明しているものと思われる。逆から、つまり左から説明すると、「崇化余志安／刊于勤有堂」の第四字の「有」と「志」字の下半に横に細い割れめが通っており、「至正辛卯孟春重校」とその左右の空行との計三行を越えて、序のこの葉の第四・三行の第一三字の「誣」「科」字にこれが続く。しかし、その中間の至正の重校記のこの位置にある「孟」字には、この筋がまったくみえないから、これは版木が損傷したあとに入木したと考えるをえない。いま手許には、中国版刻図録三二七(北京圖書館藏、完本)、この東洋文化研究所本、旧京書影三二七(當時北平圖書館藏・現北京圖書館藏、存一五卷纂例三卷)のこの書影があるが、この順に早印、後印の差があつて太さが違うが、いずれにもこの亀裂の跡がみえる。この印行の先後は、至正の重校記の「春」字の摩滅の具合で推定できる。

これが入木であれば、至正一一年に更めて本文を重校したわけであり、その結果として一部を補修した可能性がないこともない。しかし、それは本文の字様からは判別できず、また、至正重校以前の本が現存しないから、対校してその差異を識別することもかなわない。したがって至正一一年修と明記すること

はできないが、その含みをこめてその一行にある通り、その重校、そして印とした。

続いて、故唐律疏議総目一葉、故唐律疏議目錄一四葉、さらに「臣無忌等言」に始る進律疎表が一七葉ある。

本文巻首は「故唐律疏議卷第一」(低二格半)太尉揚州都督監修国史上柱国趙国公長孫無忌等撰」。次行に「名例一」と大字跨行、右下に凡七条と書く。以下、衛禁、職制、戸婚のように計一二篇あるはずであるが、名例が六巻でその首四巻が存するものである。

双辺(一九×一二・四_{チセン})。一二行、二四字・注文小字双行。版心 小黒口、双黒魚尾、「唐律幾(丁付)」と題する。

疏、疏議曰、註は低一格で墨囲陰刻。

各巻末に「釈文」を附し、巻一にだけ「奉訓大夫江西等処行中書省校校官王元亮重編」の一行を添える。

尾題「故唐律疏議卷第四」。

蔵印は大木幹一氏の「(曾見) 数／巻残／書」印。

又 存卷一、六 四冊

宮内庁書陵部蔵

後補薄茶色表紙(二三・三×一五・一_{チセン})、題簽「故唐律疏

議 麟(鳳龜竜)」、裏打。

首に唐律釈文序、「至正辛卯孟春重校」の一行と「崇化余志安／刊于勤有堂」の木記は前掲書に同じ。故唐律疏議目錄は第六巻まで。これは第二葉裏の第八行であるが、以下を切断して削除し、残りの四行分に「故唐律疏議目錄」の尾題をその前の空二行とともに繋げてある。進律表疏があつて、本文が首の名例六巻。巻六末(名例末)に「名例」と題して、王元亮の纂例一二巻の第一巻が附載されている。そして巻末に劉有慶の唐律抹子序。柳貫序がないから、「至順壬申五月印」の一行はない。

存首六巻の残本のために、目錄の巻七以下を削り、目錄尾題を切取つてその次に貼り足し、さらに劉有慶序を巻尾に持つて来て、完本のように見せかけたものではなからうか。この本の刷りもかなり遅いが、首の名例六巻だけを印行したものでもあるまい。

巻三の釈文の注文の不鮮明のところを、白で塗抹して墨または朱で補筆する。この二本ともかなり後印である。

同版本は台北の中央図書館に存卷一三、一九の七巻があり、完本が北京図書館(中国版刻図録図版_{327 328})、これは早印本であ

る」と首都図書館に、さらに北京図書館に存一八巻の残本が蔵されるというが、これは旧京書影⁴⁰¹本（旧北平図書館蔵）でやや後印。これらには王元亮の纂例一二巻が各篇末に附載されているとされるが、ここに所掲の二本は書陵部本の名例篇の末に一があるほかはこれを欠く。

清の嘉慶一三年（一八〇八）、孫星衍の岱南閣叢書にこの三〇巻が景印されたが、顧広圻（千里）の名が手摹上板あるいは覆校者として記されている。

史 評 類

致堂先生読史管見八〇巻 宋胡寅撰 宋淳熙九年（一一

八二）刊（巻四一〜五〇補写・他に欠葉補写葉多）

九冊

国立歴史民俗博物館蔵

新補紺色表紙（二五×一五・一センチ）。

首に淳熙九年胡大正（孫）の序があり、この書は「以司馬氏通鑑為目、上下二千余載、累言四十余万、其議論既詳」とい

う。致堂先生読史管見目録。目録末に双辺（外郭一五・七×五・一センチ）の四行の木記があり、次のようにいう。「嘗淳熙壬寅中

夏既望刊修于／修治之中和堂奉議郎簽書平／海軍節度判官庁公

事兼南外／宗正簿賜緋魚袋胡大正謹識」。壬寅が九年である。

本文巻首「致堂先生読史管見巻第一／（二格^低）徽猷閣直学士左

朝請郎提舉江州太平觀保定県開国男食邑七百戸賜紫金魚袋胡寅明仲撰」。ただし第二巻以後は大題だけである。左右双辺（一

七・九×一一・八センチ）、一二行、二〇字・注文小字双行。版心

白口、一部線黒口、双黒魚尾、上に字数、下に刻工名を刻す

る場合があるが少い。題は「史幾」、しかし巻二一下象鼻に「宋」と刻して宋の文帝の条であることを示すのははじめ、巻三一

三五に「陳一」〜「陳七」と小題のように附し、巻五七、六九には「恵」（唐徳宗）、「昭」（唐昭宗）とする場合もある。

下象鼻がかなり損傷しているためにであるが、稀に刻工名らしいものがある。いずれも単字で、先上人日工天地元字等があるにすぎない。一卷に異った二字がある例はなく、また一卷を

ほぼ同字で通す場合があり、千字文号でもあるまいから、だいたい一卷を同一人が彫ったということか。ただし、南宋後期の

杭州風と建安風の字様の葉が前後に続く場合も珍しくない。

避諱欠筆はあまり厳格でなく、玄敬驚警殷匡筐恒楨貞楨桓慎等の字に見られる。数字は稀に、郭字は頻繁に現れるが、ともに欠かない。

初の一部に朱句点、朱引、朱傍点が施され、校字などの貼紙のあるところがある。

卷四一〜五〇は全葉が補写されているが、卷四一は全二〇葉のうちわずかに残簡六葉（うち二葉は裏面半葉欠）が別に存し、一冊とされている。ただし版心が損傷して丁付の見えるのは第一、一二葉だけである。この他にも欠葉、補写葉は非常に多く、とくに卷九〜二〇の第二冊はほとんどの各巻に数葉ずつそれがある。補写は比較的新しく、同じ一二行の印刷野紙に行われているが、行二二字であるのになぜか字余りが甚しい。

卷四五第五葉に、本文がひとまず終って「読史管見卷第十九／宋建安胡寅著 明太倉張溥閱」とあって、「唐紀／則天皇后下」とあり、また卷四八葉第五葉裏に「読史管見卷十九終」とあって、卷四九第一葉となり、「読史管見卷第二十／宋建安胡寅著 明太倉張溥閱／唐紀／玄宗上」と続く。この題があるのはこの二箇所だけであるが、三〇巻本からの補写であろうか。

尾題「致堂先生読史管見第八十」。

蔵印は「義陽傅氏／是軒漫子」（陽陰）「義陽傅氏／是軒書府」「是軒」、「金沢文庫」、「崇蘭／館蔵」、「小汀氏蔵書」。

経籍訪古志卷三著録。重要文化財。

致堂読史管見三〇巻は、宋嘉定一二年衡陽郡齋刊本、宝宋祐二年宛陵郡齋刊本、元覆刻本が各所に蔵されるが、致堂先生読史管見八〇巻はこれと静嘉堂本が現存するだけで、中国にはない。

又 二四冊（有補写）

静嘉堂文庫蔵

後補金砂子散杏色表紙（二三・四×一四・八センチ）、金鑲玉装（料紙高さ二一センチ）。

胡大正の序、致堂先生読史管見目録があつて、本文に連るが、卷一〜四は補写。卷五の首題は同じく「致堂先生読史管見卷之五」で、その首葉は左右双边（一七・五×一一・六センチ）。

補写巻があつて、卷一〜四・六、八〜一〇の八巻。他に卷五第一葉、五十一、一七―九、五〇―七、七九―一〇。

版心下象鼻に、前掲本であげたほかに、卷四六・四七に「中々」「中中」「中」（唐中宗・中宗の中）とある。

蔵印は「泰／峯」（郁泰峯）、「婦安陸／樹声叔／桐父印」（陰）。

致堂読史管見三〇巻（欠卷二七・二八）宋胡寅撰 宋宝

祐二年（一二五四）江南宛陵郡齋刊 明成化一一年。

明通修(卷一二補写) 一四冊

お茶の水図書館(成箕堂文庫)蔵
新補赤茶色覆表紙、(二五・四×一六・七_チセン)、後補薄茶色表紙、外題「読史管見 幾」裏打補修。

宝祐二年劉震孫の読史管見序、嘉定一一年胡大壮の序が補写。

本文巻首「致堂読史管見巻第一」(低五格)威烈王(隔五格)周紀」。
左右双辺(一九・九×一三・九_チセン)、明修葉に四周双辺もある。一二行、二三字。

版心 白口、双黒魚尾、読史管見巻之(第)幾」の題、上下象鼻に字数、丁付と刻工名。

上象鼻に成化一一年の補刊年紀(一部は国子監と刻)があり、これより後の修業がわずかにある。また峻別できないが、元修葉もあるのではないか。

欠画は少いが、玄匡 貞徴 勗 桓 慎 敦 字にはかなり忠実に
行われている。刻工名は版心に破損があるためにあまり採録できず、尤達 尤必成 尤涇 允迂 允達 之吉 王祀 王桂
文正 汪思中 危文 金通 梁全 曹父 劉之吉 劉若旻 劉
森 劉洪 潘永季 楊思成 等と単字のものが多数。

蔵印は清代のものが読めず、「島田/重礼」「島田翰/読書

記」(とも、に陰)「徳富氏/珍藏記」(陽)「成箕/堂主」「蘇/峯」。

前掲の致堂先生読史管見八〇巻淳熙九年刊本、致堂読史管見三〇巻嘉定一一年刊本に次ぐ刊本であるが、この経緯は増訂中国訪書志(二五五頁)に詳しい。

史学提要三巻 元黄繼善撰 (元 建刊) 一冊

後補淡茶色表紙(二四・五×一五・四_チセン)、題簽「史学提要全」と墨書。

史学提要総目、本文首題「史学提要巻之一」(低八格)臨川黄繼善 成性 編(同) 吁 江 吳 志尹 此民 核勘」。四周双辺(一九×一一・九_チセン)、一二行、二三字・注小字双行(稀に更に双行の細注もある)。版心 線黒口、双黒魚尾の間に「史要一」のように題し、下に丁付。尾題「史学提要巻之三」。

朱筆句点、返点、連合符、送・振仮名、朱引。稀に墨筆校字、眉上の注記。巻二第一七葉裏と巻三首葉表が欠。巻二第二〇葉裏は大きく破損している。「佐伯侯毛利/高標字培松/蔵書画之印」、「秘閣/図書/之章」「帝室/図書/之章」。

初学者のために上古以来の歴史を四字句の韻文で連ね、冒頭

には「天地未分、惟一氣耳、一氣渾沌、形如雞子」のようにある。そして双行の注に音を記す場合は見出字を墨囲陰刻とする。すなわち「一氣渾沌^{●云鬼上濁}」の如くである。宋末で終るが、末に「大元」と掲げる。

北京図書館に明抄本があるばかりで、他に所在を聞かない。

金石類

至大重修宣和博古図録三〇卷 宋王黼等奉勅撰 〔元〕

刊〔明〕修 一六冊

静嘉堂文庫蔵

香色表紙（三四×二七・二センチ）。

首目がないが、台湾所在の四部もすべて同様である。

巻首「至大重修宣和博古図録巻第一」と題するが、「至大」の二字は入木されたものである。次行以下に各巻の目録。青銅の鼎から始めて台器の全形と銘文が画かれ、その釈訓が附される。

左右双辺（二八・九×二二・六センチ）。目録と釈訓は有界八行、一七字。版心 白口、「博古図録幾」と題し、上下象鼻に稀に字数、刻工名を刻する。図が一面にわたる葉は、版心の題、丁付、刻工名が右端にある。刻工名は、文玉 王介 沈貴 徐宗

桂孫 陳晟 陳寧、李伯英と伯英は明修か。単字が多く、子文夫元占玉永朱成李系沈汪林金洪俠柳貴徐陳梅寿齊揚鄭蔡騰。

版木の損傷がはげしく、上半、下半だけの葉、そこを補写した葉、全面の補写葉などが非常に多い。欠損が一五〇葉以上、補写が八〇葉もある。もはや図録としての体をなさない状況であるといつてよい。

「馬印／玉堂」「笏／斎」「漢唐齋」「帰安陸／樹声所／見金石／書画記」印。

大陸にも一七部の存在が著録されるが、大半はやはり明修本のものである。そのなかで台北の旧北平蔵の存巻二五・三〇の二巻は、元印の美本であるが、首題の冒頭の「至大」の二字は同じく入木である。

大阪府立中之島図書館蔵の三〇冊は、この本の明代の広義の覆刻本と思われる。至大の二字は以下と違和感がないが、図が整っており、それでいて図の中央に亀裂の跡があったり、修刻の様式が顕著であったりする。刻工名もほとんどない。中国古籍善本書目には明嘉靖七年蔣暘刻本が著録されるが、これと同版であろうか。

目録類

史略六卷 宋高似孫撰 宋宝慶元年（一二二五）序刊

二冊

内閣文庫蔵

後補空押雷文繫暗藍色表紙（二五・九×一七・三_{センチ}）、題簽

「高氏史略二上（三之六下）」と墨書。裏打。

「宝慶元年十月十日修十一月七日畢」の高似孫の序。

首題は「史略卷一」（低九格）高 似孫 続古。

総目はなく、各巻ごとに目録がある。

左右双辺（二〇・一×一三・八_{センチ}）、一〇行、二〇字・注文

小字双行。版心 白口、単黒魚尾、「史略幾（丁付）」と題し、

上象鼻に字数、下ときに刻工名を刻する。刻工名は単字で、

禾昌桂珪。避諱欠筆は、匡 恒 貞 桓 敦 字に行われ、年号を

正観 正元につくる。

古逸叢書に模刻されたが、この本の巻二第七葉の欠葉がそこ

にはある。朱句点、朱引、朱傍点、稀に朱筆の返点と送仮名。

尾題「史略卷六」。経籍訪古志卷三著録。

蔵印は「梅熟軒」「慈照院」（相国寺塔頭と伝えられる）、

「兼葭堂／蔵書印」「木氏／永保」「昌平坂／学問所」（墨）「文

化甲子」「浅草文庫」「日本／政府／図書」「内閣文庫」。

宋史藝文志には、高似孫の三部作ともいわれる緯略一二巻、

子略四巻は著録されるが、史略はなく、撰者不明の三巻があ

る。文淵閣書目以下の明清の書目にも、杜信撰三〇巻のよう

ものはあっても、高似孫の六巻本はみえない。中国ではほとん

ど絶えてしまったものが日本にだけ伝存したもので、天下の孤

本として古逸叢書に選ばれ、この模刻本は字様はかなり異なるも

の、以後これから三、四の叢書に収められることになった。

高似孫の自序はとくに刊刻のことに触れてはいないが、字様

や次掲の子略の刻工などの版心からみて、宝慶の刊とみてよい

と思われる。重要文化財。

近年、周天游の史略校箋が刊行され（書目文献出版社・一九

八七年）、渋江抽斎、森立之、楊守敬その他の跋も収めていて便

利である。

子略四巻首目一卷（欠巻四） 宋高似孫撰 「南宋後期」

刊 一冊

内閣文庫蔵

後補空押雷文繫暗藍色表紙（二五・九×一七・五_{センチ}）、外題

「高氏子略一_{序目}之三」と墨書、裏打。

高似孫の子略序が一葉。次で子略目一卷、全二五葉。その巻は「子略目第一」と題するが、以下に巻次の区分はない。漢書藝文志・隋書經籍志・唐書藝文志・子鈔・意林・通志藝文略の子書を列挙するもので、本文巻一以下の目次ではないからである。なお長沢規矩氏がこの子略目について、「漢志未載の亢倉子・鬼谷子等が所録の呂氏春秋・淮南子・塩鉄論等の前に在り、従ふを得ず」という（支那書籍解題書目書誌之部）。

本文も巻一が黃帝陰符經から始って雜家や儒家が混り、巻二に老莊等、巻三が戰國策に始って法・雜・家等が収められ、順序の規準が必ずしも定かではない。巻四は欠卷であるが、儒・法家や術数があるはずである。

本文首題は「子略卷一／（低九格）高氏 似孫 続古」。

左右双辺（二〇・二×一三・九チン）、一〇行、二〇字・注文小字双行。版心 白口、單黒魚尾、「子略幾（丁付）」と題し、上象鼻に字数、下に刻工名を刻する。刻工名は王日 王進 吳茂 金振、單字の王日 吳昌 金桂 茂進。王日、金振の名は他の宋版にみえず、王進と吳茂はそれぞれ単独で、南宋前期刊の國語、同撫州公使庫刊の春秋經伝集解、越刊八行本の尚書正義、同兩淮江東轉運使刊漢書、淳熙五年刊の漢雋、南宋中期刊の古史、

同期の修で明州文選、いわゆる眉山七史、南宋後期刊の晦庵先生文集や古史、嘉泰年間周必大刊文苑英華などに同名がある。南宋前・中期のものが多く、後期に属する宝慶の刻工とは思えないが、高似孫の本貫が四明勤県であり、浙刊本の可能性があるから、中期以降の刻工にあるいは同一人がいるかも知れない。

欠画が 朗 恒 貞 恒 慎 廓の各字に行われている。

史略とほぼ同時の刊であろう。子略の高似孫の序に年代はないが、行格、字様がまったく同一である。史略とともに重要文化財。

子略は史略と異って宋史藝文志以来の諸目録に四卷として著録されており、咸淳本、弘治本、嘉慶本などと称されるものが伝存し、百川学海をはじめ、四庫全書等にも含まれている。これらはいずれも四卷本で、本版はその卷三までしかなく、残念ながら欠卷四である。

例言は（上）の冒頭に掲げたので、本稿には省略した。前輯（第二十七輯）参照。

一連の調査に際して、秘蔵の貴重典籍の閲覧および複写を許可された所蔵者、関係者各位に深い感謝の意を表する。